

幼児の教育 第115巻 第1号 平成28年1月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考
「行事」って何だ？

[シリーズ] 子どもが育つ場所から
人と共に生きる心を育む

[子ども学探訪] 幼児の教育アーカイブズとの対話
画像にみる「幼児の生活」

第115巻 第1号 日本幼稚園協会

冬 2015
2016

since 1901



子どもがもらって
すぐに使える字典

はじめてつかう

漢字字典

小学校6年間で学ぶ漢字を学年別に示しました。子どもの生活や学習に必要で、よく親しまれていることばを選んで作られた字典です。絵を見ただけで漢字の意味と形と読み方がわかる「絵場面」など、新しい工夫も充実！ 全ての漢字にふりがな付き。

商品コード 303-50 定価 税込 1,000 円 (本体 926 円 + 税 8%)

村石昭三／監修 首藤久義／編著 坂崎千春・井上雪子／イラスト

浅葉克己／古代字 祖父江 慎／デザイン

セット内容 本体1 ビニールカバー付き 規格 22×15 cm 400 ページ

ISBN 978-4-577-81372-0

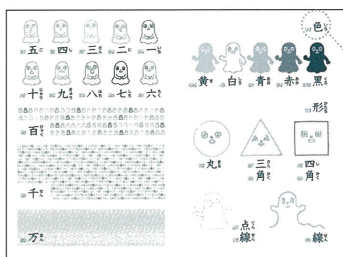
幼児から使える
字典の決定版です！



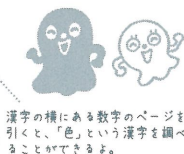
POINT1

1年生や幼児でも引くことができる

巻頭に、読みや画数、部首がわからなくても、絵から漢字を引くことができる絵場面索引付き。自分で字典を引く自信がつかます。絵場面索引は、1、2年生で習う全ての漢字を取り上げ、漢字の意味やはたらきにに応じて、漢字同士の関係がわかるようになっています。



絵場面索引は、ほかの字典にはない、この字典だけの大きな特長です。



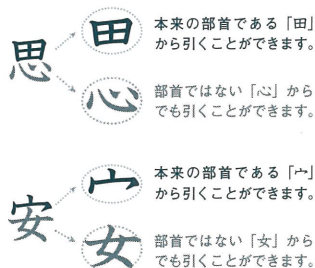
漢字の横にある数字のページを引くと、「色」という漢字を調べることができますよ。



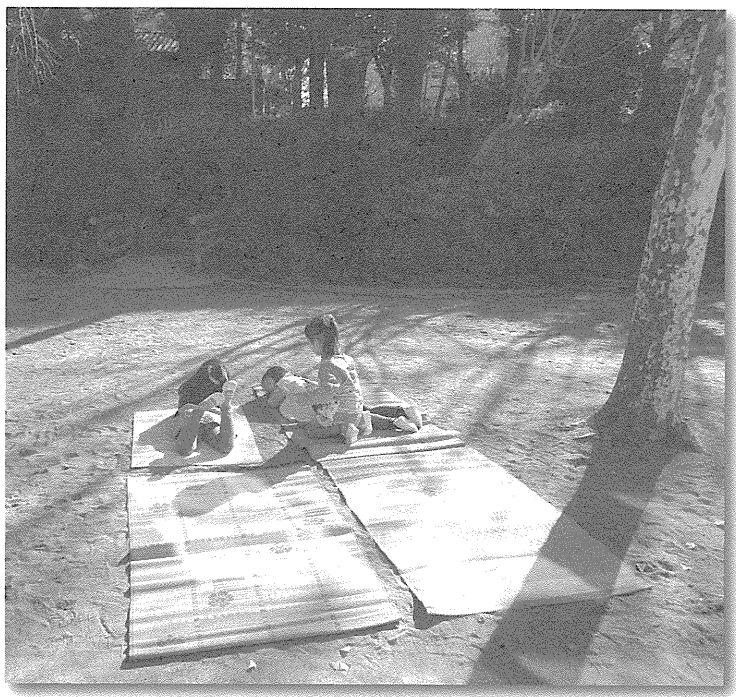
POINT2

部首索引にもひと工夫

部首索引を工夫し、引くときのイライラを少なくしました（部首・部品索引）。例えば「思」「安」は…。



※全ての部品が引けるわけではありません。よく目立つ、代表的な部品を厳選して索引にしました。



あつたかいね

子どもの情景

幼児の教育 冬 2015 2016

第115巻 第1号

写真

子どもの情景 ①

目次 まど

行事という教育経験 ②

特集

保育現場で気になるコトバ考 8

「行事」って何だ? ④

《view 視野》

保育の日常と「ハレの日」 磯部裕子 ⑤

《視点》

行事を楽しみ、伝えていく すこあさえ ⑩

それでも行事はやって来る! 石矢友里 ⑭

韓国の保育・幼児教育における「行事」 林志妍 ⑮

《特集 memo》 ⑮

シリーズ

子どもが育つ場所から

人と共に生きる心を育む 古賀松香 ⑮

実践研究

私の保育ノート

イメージを重ねて 三宅智子 ⑮

育休日誌

母になるということ その4 都司明子 ⑮

保育エッセイ

子どもは豊かな遊びの世界を生きている ⑮

子どもが遊ぶということ 河邊真子 ⑮

本棚

古典の散歩道

ウィニコットと「クマのプーさん」 井原成男 ⑮

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

子ども学探訪

幼児の教育アーカイブズとの対話 ③

画像にみる「幼児の生活」③

— 四十年前の子どもたち

(昭和五二年) — 浜口順子

52

講演

高橋清賀子氏・大戸美也子氏

「幼稚園草創期の保育者に学ぶ」

— 初代保母 豊田芙雄の挑戦」(2)

構成／安谷陽子

56

目録

『幼児の教育』平成二十七年総目録

62

子ども学のひろば

イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他

63

まど

行事という教育経験

日本で学校教育を一定期間受けたことのある人なら、「クシ」スボスト」や「天国と地獄」のメロデーを、運動会の記憶と関係なく聞ける人はいないのではないかと。卒業式の「仰げば尊し」や「螢の光」の歌もしかりである(もともと後者のメロデーには、「もう閉店」のイメージもあるが)。

運動会も卒業式も、園や学校において大概は欠かせない行事となっている。しかも、その前に予行演習をすることが多い。なぜなら、それらの行事では、ピリッと緊張感のある雰囲気やたゆみなく展開される整序性、全体の統一感が尊重されるからである。幼児教育段階でその精度をどこまで追求するかは、園によって違う。つまり、保育者が行事の教育的意味をどうとらえるかにかかっている。保護者に喜んでもらうためだけの「ニース対応」は、教育とはいえない。園の教育方針として、行事をどのようなものにするのか、保護者に説明し理解してもらう必要がある。

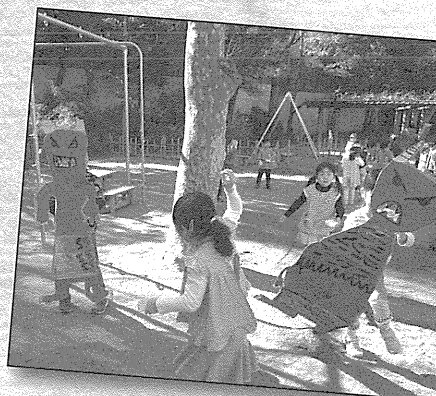
行事の持つ「反復性」という特質を通して、人はいわば文化的な季節を経験する。子どもは「運動会がまた来る」とか「今度は私たちが卒業する番だ」と、巡っては訪れる行事を友達と共に享受し、自らの成長を実感し確かめていく。(H)

特集

保育現場で「気になるコトバ考」 「行事」って何だ？



一月はお正月だからコマやカルタ。
二月は豆まきで鬼のお面作り、三月
はひな祭りだから……。
「そんなの常識」「毎年やるから」と
言ってしまうばそれまで。
今回の特集では「行事とはそもそも
何なのか」「なぜ園でやるの」「子ども
にとって園行事はどんな体験？」
「韓国と日本の園行事はどう違うの
か」など考えてみます。



view

視野

保育の日常と「ハレの日」

磯部裕子

(大学教員)

はじめに

幼稚園教育要領第3章に「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。」と記されている。ここで、あえて行事の指導について特記するということは、わが国の保育実践には、行事の指導について留意せざるを得ない実態があるということを示唆している。

『現代保育用語辞典』に「行事保育」という項目がある。^{注1} 著者である岸井勇雄は、行事保育とは、行事を中心とした保育のことであると解説した上で、一九四八（昭和二三）年の保育要領では「幼児の情操を養い、保育に変化と潤いを与え、郷土的な気分を作ってやる上から、年中行事はできるだけ保育にとり入れることが必要である。」と、保育内容に行事を積極的に

磯部裕子（いそべひろこ）

宮城学院女子大学教授。専門領域：保育のカリキュラム論。保育内容の創造と環境とのかかわりについて実践者と協同して研究を続けている。

取り入れようとしているのに対し、その後の幼稚園教育要領が行事に対してむしろブレーキをかけるようになってきていることを指摘し、その理由を「現実には、保育のために取り入れた行事が本末転倒して行事のための保育となり、幼児も保育者も無用の苦しみを与えられている例が少なくないからである。」と述べている。

行事が保育に変化や潤いを与えるものなのか、あるいは無用の苦しみを与えるものなのか、そこにある課題を検証してみたい。

「ハレの日」とっての行事

多くの園が、保育の年間計画の中に行事を位置付け、年度当初から行事を計画している。それらの行事を概観すると、日本古来の文化や伝統を伝え、日本独特の季節の変化を感じ取ることができるような「伝承的行事」、暦や地域に関係なく国民の行事として設定された「社会的行事」と共に、保育、教育の場ならではの行事がある。保育、教育の場ならではの行事としては、入園式、卒園式などの儀式としての行事、生活発表会や運動会などの保育のまとめや節目としての行事、さらには、園外活動や安全活動などの行事、などがあり、こうして見ると、保育の場における行事のありようは、一年間の保育内容を構想する上で、重要な意味を持つことになる。従って、「その教育的価値を十分検討し、適切なものを精選」することが必要となる。一つ一つの行事には、確かに意味がある。特に、伝承的行事のように、昨今の家庭環境では経験することが難しくなった行事などは、保育の場で体験できるようにしていくことも、これからの保育内容を検討していく上では、重要な視点かもしれない。^{※2}

一方、古来より、日本人は、ハレの日としての「行事」を日々の暮らしの中に位置付け、生活してきた。ハレの日である行事は「特別な日」であり、その「非日常性」に意味がある。この「非日常性」が保育の中に取り入れられることは、「変化や潤い」をもたらす上で、意味がある。しかし、保育という営為は、生活を通して行う。従って、保育内容の中心は、子どもたちの日常生活そのものである。つまり、日常としての「ケ」が、保育そのものということになる。日常の遊びを中心とした生活の充実があつてこそ、特別な日としての「ハレの日」が生きてくる。本来、変化や潤いを生むはずの「ハレの日」が、「幼児の負担」を生んだり、「無用の苦しみ」に至っているのは、なぜなのか、その背景を探ってみよう。

「成果の発表の場」としての行事

保育内容としての伝承的行事、社会的行事のありようについての検証は、別紙に譲ることとして、ここでは保育、教育現場ならではの行事、特に「保育のまとめや節目としての行事」について検討してみたい。なぜなら、「幼児の負担」を生んだり、「無用の苦しみ」に至っている行事の多くは、これに類するものだからである。具体的には、運動会や生活発表会などがこれにあたる。問題は、これらの行事が、保育の「まとめや節目」を超えた「成果の発表の場」となっていることにある。

繰り返しになるが、保育の中心は、生活そのものである。遊びを中心とし、生活そのものを教育内容とする実践である保育は、そもそも教科学習のように目に見える形で教育成果を示しづらい。しかし、教育という営為を実践している以上、保育の場においても、子ども

の学びの様子を明らかにしていくことは、保育者の責任でもある。従って、多くの保育者は、この「子どもの学びの姿」を何らかの形で、保護者等に発信しようと努力する。しかし、そもそも“invisible pedagogy”（目に見えない教育）である保育の学びの実態を整理し、わかりやすく発信することは容易ではない。昨今は、ドキュメンテーション、ラーニング・ストーリーなど、子どもの学びの軌跡を言語化し、評価する研究と実践が進められているが、わが国の実践は、未だそこに至る十分な実践をつくり上げられずにいる。その結果、安易に教育の成果を“visible”なものにしようとする方向に転化していく。行事が、保育の成果の発表の場となれば、より見栄えの良いもの、より成果が明確なものとして発表しようとする力が働く。その結果、日常の保育のまとめではなく、発表の場としての行事に向かって「準備する実践」が生まれる。

保育が「準備する実践」となった時、それは、日常の生活そのものを大切にした保育の本質からは遠く離れた実践と変容していくことになる。

おわりに

イギリス海軍士官の指導で始まった「競闘遊戯」が起源とされる運動会は、今や学校行事の代表となっている。幼稚園でも多くの園が、運動会を大きな年間行事の一つとして位置付けている。

一方、徹底して保育の日常を大切にしたい保育内容を実践するために、運動会の開催を取りやめた園がある。そのことにより、子どもたちは運動会の準備や練習から解放され、保育者

たちは子どもと共に秋の自然を実感し、秋の暮らしづくりをじっくり楽しむ保育を実現している。そこには、運動会というハレの日の華やかさはないが、生活による保育の醍醐味がある。入園式さえも取りやめた園もある。幼子がハレ着を着て、緊張と不安の中で初めての幼稚園の儀式を経験することよりも、幼稚園の日常としてのケの日の楽しさを実感し、納得し、「またあした」を楽しむにできる始まりの日とすることに意味を見いだしたからである。

保育の年間計画は、それぞれの園が何を大切に保育をしたいのかという理念の検証の上に描かれるべきものである。行事もまた、「あるべきもの」から解放し、保育の日常の先にある「ハレの日」の意味を問い直すことから始める必要がある。

注

1 岡田正章他編『現代保育用語辞典』フレール館 一九九七年 p.119

2 筆者が二〇一四年に大学一年生を対象に行った調査では、節分の際に家庭で豆まきをした経験がある学生は50%程度であった。

3 レッジョ・エミリアの幼児教育は、子どもの学びの軌跡をドキュメンテーションとして記録している。またテ・ファリキのラーニング・ストーリーは、一人ひとりの学びや育ちの事実を記録する評価法として注目されている。

視点1

行事を楽しみ、伝えていく

すとうあさえ
(幼年童話作家)

私はある保育雑誌で一年間、季節の行事の由来を連載したことがあります。調べていくうちに、先人たちの価値観や美意識、遊び心を知って、興味が湧き、のめり込んでいきました。そして、多くの方にとってほしいと思うようになり、『子どもと楽しむ行事とあそびのえほん』を書きました。

昔から伝えられている行事は、今も暮らしの中に生き続けています。私の母は、ひな祭りによく、雛^{ひな}寿^{ずし}司を作ってくれました。今は私が作っています。家族十名分。お内裏様はペアなので二十人の雛^{ひな}寿^{ずし}司がずらりと並びま

す。わが家のひな祭りの景色が孫世代へと伝わっていくと思います。私たち自身が伝承者なんですね。

今回は、季節の行事の中から三つを選んで、お話ししたいと思います。小さな人たちと、園や家庭で祝っていただけならうれしいです。



▲雛^{ひな}寿^{ずし}司。四歳の孫娘との共作

すとうあさえ
『子どもと楽しむ 行事とあそびのえほん』（のら書店）で産経児童出版文化賞、『はしれ ティーセルきかんしゃデーデ』（童心社）で住田物流奨励賞を受賞。聖セシリア女子短期大学非常勤講師。

端午の節句の「柏かしわ」と「菖蒲しょうぶ」

五月五日は、端午の節句です。男子の成長を願う行事で、こいのぼりをあげたり、五月人形を飾ったりします。行事食は柏餅、ちまき。菖蒲湯に入り、菖蒲を頭に巻くと賢くなれるといわれています。ここまではよく知られていることで、園でもこいのぼりを制作したり、かぶとを折ったりすると思います。

では、なぜ柏餅を食べたり、菖蒲湯に入ったりするのでしょうか。

柏の葉は、冬になると枯れますが、新芽が出るまで落ちません。私も実際に見たことがあります。こんなに枯れているのに何で落ちないのだろうと不思議に思いました。その様子に「子孫繁栄」子の成長を見守る親の気持ち」を重ねて、端午の節句に柏の葉でくるんだお餅を食べるのだそうです。昔の人は、身近な木や花や草などをよく観察していて、

その特徴を行事に織り込んでいます。素晴らしいセンス。それだけ自然と向き合って暮らしていたということだと思います。ちなみに、秋になると柏は赤い帽子のかわいい実をつけます。もし近くに柏があつたら、一年を通して観察してみてください。

端午の節句には、菖蒲やヨモギで厄払いをします。民話「くわすにようぼう」では、菖蒲とヨモギが鬼ばばを退治してくれます。どちらにもおいが強いので、穢けがれをはらう力があるとされています。ただ、間違いやすいのが菖蒲。主役は、アヤメ科の花菖蒲ではなく、気の毒なくらい地味な花をつけるサトイモ科の菖蒲です。五月は暑くなり始めて、悪い虫や病気がはやりやすくなる頃。昔の人たちは、植物の力で病や穢けがれをはらおうとしたのです。子どもたちに、菖蒲やヨモギのにおいを嗅かせてあげてください。五感の鋭い子どもたち。穢けがれをはらうにおいをキャッチするかも。

七夕の「かざり物」

七夕は、七月七日。織姫と彦星が天の川を渡って一年で一日だけ会えるというロマンチックな星伝説や、笹飾り、行事食のそうめん。これは、よく知られていることです。では、織姫と彦星はどうやって天の川を渡るのでしょうか。ある集まりで七夕の話をした時に、参加者に聞いてみました。すると、「泳いで渡る」「石の橋を作る」「船で渡る」などいろんな答えが出ました。意外に知らないのが驚きました。正解は「かざさぎの橋」です。かざさぎという鳥が羽と羽を合わせて橋を作ります。かざさぎはカラスの仲間で、「カチカチ」と鳴くので勝ち鳥といわれ、縁起の良い鳥とされています。佐賀県の鳥です。中国の鳥だと思っていたので、佐賀の鳥だと知った時は、ぐんと星伝説が身近に思えてうれしかったのです。かざさぎという鳥を、ぜひ子どもたちに

教えてあげてください。

また、笹飾りには一

つ一つ意味があります。

よく作る「輪つなぎ」

は、「どんどん長くつな

げて天に願い事を届ける

」という意味がある

そうです。また、短冊

に願い事を書くように

なったのは、江戸時代の寺子屋が始まりで、

昔は「梶」の葉の裏に書いていました。寺子

屋に倣って四角い紙でなくても、好きな形の

紙に願い事を書いてもいいのです。行事の形

は時代とともに変化しています。私たちも、

自由な発想で楽しみたいものです。

節分の「鬼はらいのおまじない」

立春の前日の節分には、「豆まきをして鬼を追ひ払います。旧暦で暮らしていた時、一月



▲願いは一つ。十五歳の愛犬の健康

一日は、立春に一番近い新月の日でした。現在も中国などでは旧正月になると盛大にお祝いをします。立春は、新しい年の始まりを決める大事な目安の日。そこで新年を迎えるにあたり、邪気や穢れ（鬼）をはらいます。そしてもう一つ。私たちの心の中に住んでいる鬼（意地悪鬼、嘘つき鬼、怒り鬼などなど）を追い払い、きれいな心で新年を迎えるという意味もあるように思います。

昔から、節分には「焼^やいかがし」というおまじないがあります。ヒイラギの枝に焼いたイワシの頭を刺して、玄閼や軒下に挿します。鬼はヒイラギのトゲで目を刺されるのを恐れ、イワシの臭いを嫌うので近寄ってこないそうです。最近では、節分が近づいてくると、お店で売られるようになりました。わが家では毎年作って玄閼に挿しておきます。昔の人の、行事に自然の力を取り込む知恵には本当に感心してしまいます。ヒイラギのトゲ、ほんと

に痛いです。子どもたちに触らせてあげてください。

行事を伝承する

行事の両輪は、

「祈り」と「感謝」

だと思っています。「豊作」「健康」「幸せ」を神に祈り、感謝します。昔は病気になっても良い薬や優秀な医者に頼れるわけではなく、自然災害に見舞われても抵抗するすべがありません。ただ神様に祈り、願うだけです。自然を人がコントロールするのではなく、自然と共に生きていくという価値観がそこにあります。

日本は四季の移ろいの美しい国です。家庭や園で、小さな頃から行事に親しむことで、私たちの先祖が育んできた感謝や祈り、自然への畏敬の念が、未来へと伝承されていったらいいと思います。



▲わが家はヒイラギモクセイの焼^やいかがし

視点2

それでも行事はやって来る！

石矢友里

(元幼稚園教諭)

園行事には、入園式や卒園式などの式典、遠足などの園外保育、運動会や生活発表会、七夕や節分などの伝統行事、とさまざまなものがある。特に、運動会や発表会については、保育者は毎年頭を悩ませているに違いない。私もその一人だった。保育者生活で一番の苦しい思い出は、新卒一年目の発表会でのことだ。

大げんかの発表会から

幼稚園で、生活発表会が近づいてきた。二年保育年少組で取り組んだのは、おおきなおいもという劇遊び。クラスで読んでいた絵本『おおきなかぶ』を芋掘り遠足の経験に合

わせてアレンジしたものだ。次々に動物たちが集まり、最後に大きなサツマイモを抜くというストーリー。その頃の私はどうやって劇遊びの指導をしたらよいかわからず、手探りの日々。子どもたちが思うように動いてくれないことに悩み、奮闘していた。

発表会当日。子どもたちより私のほうが緊張していた。とうとう私のクラスの番だ。ところが開始早々、芋を引つ張る順番をめぐり、三人の男児がつかみ合いのけんかを始めたのである。「これまでこんなことなかったのに……！」私の頭の中は真っ白。他の先生の力も借りてどうにか事態を収拾し、劇の最後まで

石矢友里（いしやゆり）
幼稚園教諭として、東京都公立幼稚園・認定こども園に
7年間勤める。現在は、2歳になった息子の子育て真っ
最中。

たどり着いた。その日は、職員室で大反省会。これまで劇に取り組んできた子どもたちにも、発表会を楽しみにしていた保護者にも、アドバイスをくれた先生方にも申し訳なく、自分の未熟さにただ涙が出るばかりだった。

持ち上がりで同じクラスの担任として年長組になった。そしてまた発表会の季節がやって来た。前年度の発表会から劇遊びがトラウマ状態の私は、不安で仕方がなかった。それでもやって来るのが行事。年長組では、自分たちでストーリーを考え、海賊が宝を探しに冒険に行くという創作劇をすることになった。

クラスで劇について話し合っている時のこと。ある子が「そういえば年少組の時、発表会でA君たちがケンカしたんだよねー」と言うと、「そうそうー」「大変だったよねーあの時は」と皆その時のことを思い出し、口々に話した。当の本人たちは「へへへー」「ごめんごめんー」「だってさあー」と苦笑い

である。そんな子どもたちの姿に私も思わず笑ってしまい「本当、大変だったよねー。みんな、こんなに頑張ってるんだもん！今年はおつかいところ見せたいよねー」と言葉が出てきた。すーっと肩の力が抜けた瞬間だった。それからは、私自身も楽しみながら練習や準備をし、本番を迎えることができた。

発表会当日。ちよつとしたハプニングはあったものの、劇は大成。子どもたちも「やったー」「ドキドキしたけど、楽しかったー」「頑張って練習したもんねー」と、満足感や達成感でいっぱいの表情だった。保護者も、「年少組の時を思い出すと信じられない」「毎日、家でも劇の話をしていたんです」「みんな一生懸命で、楽しそうに劇をしていたのが印象的でした」と話してくれた。

そんなエピソードを思い出すと、行事は、日常を切り取るものゝであると感じる。保育者も、子どもも、保護者も、昨年の姿を思

い出し、比べて、一人ひとりの、そしてクラスとしての成長を実感できる大切な機会になるのだ。その時はわからないかもしれない。でも一年たつてまた同じ行事がやって来た時、子どもたちのどんな経験も無駄ではなく、しっかりと蓄積されているのだと、一年目の当時の私に教えてあげたい。

また一方で、行事は子どもたちの日常生活につながっていくものゝであることも大切だ。例えば、運動会。運動会後に、遊びの中で運動会ごっこが始まる園も多いだろう。自分の種目に限らず、小さいクラスが大きいクラスのダンスをまねしたり、先生役になって教えたり。そうやって、大きいクラスの姿に憧れたり、小さいクラスの子どもたちが自分たちをまねしてくれるうれしさを感じたりしながら、運動会での経験が自分の中に落ちていくのだ。ある時は、消防署見学に行った翌日から、「〇〇組で火事だ！」と消防隊ごっこが始

まったこともあった。行事での経験が遊びの刺激となり、子どもたちの日常である遊びにつながっていくのもまた、行事の特徴である。
当たり前だと思っていたけれど……

もう一つ欠かせないのが、伝統行事である。店頭で早々と並ぶ節分の豆やひなあられを見て、「どんな鬼のお面を作るか早く考えなくちゃ」「ひな人形の準備をしなくちゃ」と焦ったものだ。園では、その伝統行事にちなんだ物を子どもたちと作ったり飾ったりし、その由来をわかりやすく伝えることが多い。保護者から、「うちは毎年、園から持ち帰った鬼のお面をパパがかぶって豆まきをするんですよ」「先生に教えてもらった節分の由来を子どもが覚えてきて、話してくれました」「幼稚園で作った兄弟みんなの分のひな人形を並べて飾っているんです」と言われたことがある。

思えば、伝統行事とは本来、それぞれの地

域や家庭で行われてきたものである。園で伝統行事に取り組む時にも、地域や家庭とのつながりを忘れてはならないと感じた。

節分といえ、さまざまな園の先生方と、各園で節分の行事にどのように取り組んでいるかを話し合う機会があった。鬼の面を作ることは共通していた中、「職員が鬼に扮して園内を歩き回る。怖がって泣く子もいれば、立ち向かっていく子もいる」鬼は自分のイメージ。そこにいると想像した鬼に向かって豆を投げる「うちの地方では……」など、違う点多かった。節分を園で取り組むねらい、活動内容……当たり前に、時期が来れば取り組むものだと思っていた伝統行事について、立ち止まって意見を交わすことが新鮮だった。

行事についてじっくりと考えるのは、これで二度目かもしれない。一度目は、勤めていた公立幼稚園が近隣の保育園と統合し、認定

こども園になった時のことだ。開園一年目、保育者も子どもも、何だかいろいろな行事の準備に忙しい日々を過ごしていた。「行事に追われている」という声が聞こえるようになり、私も担任として、好きな遊びにじっくりと取り組める時間を確保してあげたいと思うようになった。皆で話し合い、開園前に園行事の年間計画を立てたはずなのに……。

そこで考えたことは、子どもたちにとって大切なことは何か、伝えたいことは何か、経験させたいことは何か、ということだった。単純だけど、深い。当たり前のようにやって来る行事について、そうやってじっくりと考えることが、実は大切なのだと思う。

それでも行事はやって来る！ だけど、行事はたくさんあることを教えてくれる。そんなふうに考えながら、保育者も、子どもも、保護者も、準備から当日、そして余韻までをたっぷり楽しめたら、その行事は大成である。

視点3

韓国の保育・幼児教育における「行事」

林志妍
(大学院生)

私は、韓国の大学の幼児教育学科を卒業し、幼稚園教諭として三年間勤め、今は日本の大学院で保育を学んでいます。このような経歴のためか、私は、日本と韓国の保育現場で何を見ても、すぐ両国のことを比較してしまいがちです。

本稿では、この私の目から見た韓国の保育・幼児教育の行事について少し紹介し、その特徴を日本の保育における行事に照らし合わせて考えてみたいと思います。本稿で紹介する韓国の保育における内容は、私が個人的に観察した時の記録を基にしています。

韓国の保育園・幼稚園の年中行事

韓国の保育園・幼稚園では、二〇一三年に告示された国レベルの教育課程指針の「ヌリ課程」を基にさまざまな年中行事を計画しています。行事の種類や時期は園によってそれぞれですが、一つの例として、釜山市にあるM幼稚園の年間行事計画を挙げてみます。

三月 入学式・公園見学
四月 父母個別相談・保健所見学
五月 子どもの日・公園見学・春の遠足

林 志妍 (いむ じょん)

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻 保育・児童学コース博士後期課程。日韓の保育の比較と学び合いの可能性に関心を持っている。

六月 地域の砂祭り参加・釜山博物館見学・

ジャガイモ掘り

七月 水産科学館見学・家族キャンプ・夏休み

八月 図書館見学

九月 白菜種まき・ミュージカル鑑賞

十月 個別相談・秋の遠足

十一月 UN記念公園見学・家族参観授業

十二月 バザー・クリスマス・冬休み

一月 科学教育院見学

二月 小学校見学・卒業式

M幼稚園のように、韓国の幼稚園では一学年が三月に始まり、二月に終わります。三月に入学し、五月の「子どもの日」を祝う行事をしたり、春の遠足に出掛けたりします。六月にはジャガイモを掘り、七月のキャンプ後に夏休みに入ります。九月には白菜の種をまいたり、十月には秋の遠足をしたりします。十二月には、子どもたちの発表会も含めたバ

ザーとクリスマスのお祝いをし、その後、冬休みに入ります。そして、一月から三学期が始まり、二月の卒業式に向かいます。

学びのきっかけとしての「行事」

M幼稚園の年中行事を眺めてみると、一見韓国の年中行事は日本とあまり変わらない気がします。しかし、注目に値するのは、M幼稚園の行事には、春と秋の遠足以外に月一回の頻度で「〇〇見学」があるという点です。これは韓国の保育の特徴を表していると思います。韓国では、保育計画で「生活主題」（単元に当たります）を中心にさまざまな活動が計画されますが、「〇〇見学」はその月の「生活主題」と強く関連しています。例えば、六月には「夏」という「生活主題」を中心に活動が展開されますが、それに合わせて、地域のビーチで行われる「砂祭り」に参加することが計画されました。一月は「小学校」とい

う「生活主題」に合わせて、「小学校見学」が計画されています。

M幼稚園では十二月に、子どもたちの小さな発表を含めたバザーを開き、保護者の方を誘う行事があります。各家庭で集めた中古の品物を安く売って、その利益金を寄付するのがこのバザーの趣旨です。この行事を行う理由について、M幼稚園の先生は「年長さんたちには、このバザーを通して経済観念を身に付けてほしいです。それで、一週間くらいは『バザー』を主題として話し合いをしました。また、十一月の生活主題『環境と生活』で取り上げた資源の節約の観念等もかわつてくると思います」と説明してくれました。

このようにM幼稚園の先生方は「行事」の教育的意味を「何かについて学ぶ」機会として意識していました。つまり、M幼稚園では、「生活主題」で扱っている内容を実際の体験を通して子どもたちに学ばせることに「行事」

の目的を置いているように私は感じました。

伝統文化と先祖の知恵を感じさせる「行事」

最近、韓国では、行事を少し違う視点からとらえる動きがあります。それは、従来の保育・幼児教育ではあまり注目されてこなかった韓国の伝統的な行事を園の行事として生かす動きです。釜山市にあるP保育園は、韓国の伝統社会で守られてきた習慣——「歳時風俗」を保育の主な行事として取り入れている代表的な園です。P保育園の年間行事計画を挙げてみます（韓国の伝統的な行事は旧暦に即して行います）。

三月 保護者の集まり

四月 寒食（陽暦四月六日。植樹をし、ヨモギ餅、

そば、のり巻きなど冷たい物を食べる。伝

統遊びのサギ相撲や摘み草競走等をする）

五月 子どもの日・田植え

六月 端午（旧五月五日）・現場学習

七月 家族音楽会

八月 七夕（旧七月七日）

九月 秋夕（旧八月十五日）

十月 運動会・稲刈り

十一月 家族参観活動・上月（一年中で最高の月と

いう意味で陰暦十月のことを指す。園では餃子スープを食べたり、天地に対して感謝の儀式を行ったりする）

十二月 クリスマス・冬至・キムチ作り・味噌作り

一月 個別面談

二月 お正月（旧一月一日）・卒業式

このように、P保育園では、米作りから味噌作り、端午や冬至まで、伝統的な生活の節目にあった歳時風俗を積極的に取り入れています。

私がP保育園を訪れた日はたまたま「冬至」でした。「冬至」は二十四節気の一つであり、一年中で夜が最も長い日で、韓国では昔から

おしるこを食べて、さまざまな遊びをする習慣があります。そこでP保育園では「冬至」を迎えていろいろな催しをしていました。ホールでは子どもたちが伝統遊び（馬跳び・脚数え等）を体験できる場をつくり、園庭の端では、釜からおしるこの匂いがしました。この日は子どもたちのお母さんやおばあさんも園に遊びに来て、おしるこ作りを手伝ったり、一緒に食べたり、伝統の遊びを教えたりしていました。一日中、園には子どもと大人たちのにぎやかな声に満ちた楽しい雰囲気が漂っていました。

園長先生は、このように韓国の伝統的な歳



▲脚数え



▲馬跳び

時風俗を保育の中で生かす理由について、「子どもたちに、われわれの先祖の精神を感じながら、季節の変化に合わせた生活を送らせたいです。そして、安全な天然の物を食べる先祖の知恵を学ぶ機会をつくりたいです」と語ってくれました。このように韓国では、「行事」によって「伝統」の中にある先祖の知恵を子どもたちに伝えていくこうしていました。

日本の保育に照らしてみた韓国の「行事」

私は、韓国の保育園や幼稚園での「行事」の特徴は「生活主題」や先祖の知恵を学ばせるきっかけとして、積極的に行事を行おうとするところにあると思います。

ところが、日本の保育園や幼稚園の行事を見てきた私は、このような韓国のとらえ方には何だか物足りなさを感じてしまいます。それは、韓国では、行事における子どもたちの経験を行事当日に限定しているような気がす

るからです。少なくとも私が観察した日本の園では、行事当日の経験より、子どもたちが行事を準備する過程で経験する葛藤や悩みを大切にしていました。例えば、私が観察した園の先生たちは、発表会に向けて練習している子どもたちが、緊張して言えなかったセリフをスムーズに言えた時の喜びを何より大事にしていました。私は、このような「行事」のプロセスを大事にする姿勢は、今後韓国の保育・幼児教育においても生かす必要があると思います。

日本と韓国の保育において「行事」への考え方が少し違うとしても、両国の子どもたちが、日常とは違う特別な「行事」をいつも楽しんでいることには変わりがありません。子どもたちの好きな発表会や運動会など、その中に潜んでいる保育的な意味について探り出し、十分生かしていくこそが、日韓の保育者の共通の仕事ではないかと思っています。



今回の特集では、現代の幼児教育と行事の関係について、磯部先生、すとう先生、石矢先生、林先生に、それぞれの観点からご寄稿を頂いた。

「昔の行事はどうだったんだろう?」とアーカイブズで検索すると、ちょうど六十年前の『幼児の教育』誌(第五十五巻第一号)に、当時の家庭でどのような年間行事が組まれていたかを調査した結果が報告されている。徳久孝先生(東京・番町幼稚園)が、園における行事教育について考えるために、300家庭を対象に、次の19項目について質問した。括弧内は実施している家庭数である。

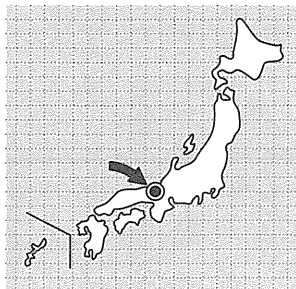
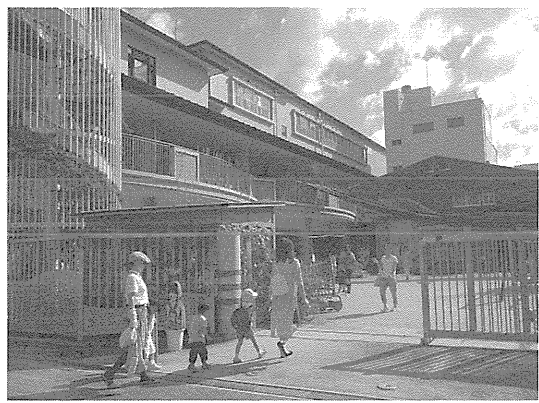
①こどもの誕生日(299) ②こどもの日(297) ③節分(275) ④クリスマス(271) ⑤家族の誕生日(270) ⑥七夕(262) ⑦お彼岸(253) ⑧⑩おまつり、七五三、ひなまつり(246で同数) ⑪お月見(227) ⑫お盆(226) ⑬母の日(163) ⑭老人の日(84) ⑮虫歯予防デー(83) ⑯父の日(78) ⑰伝染病予防週間(61) ⑱花まつり(58) ⑲復活祭(30)。

「こどもの誕生日」の祝い方としては、「ご馳走をし家族で祝う」が299件中285件と最も多く、今に通じる光景が思い浮かぶが、一方で「贈物をする」のは半数以下の135件、「記念写真を撮る」は22件と、やはり隔世の感もある。「虫歯予防デー」が行事に位置付けられているが、「終戦後、年を追って子供の歯が悪くなっている時に、此の日を機会に歯の診察を受けるとか、歯磨きの習慣を徹底する事が必要」だった。戦後、子どもが甘いものを摂取しやすい環境となり「虫歯」が新しい問題になっていたことがわかる。(H)

シリーズ

子どもが育つ
場所から

人と共に生きる心を育む



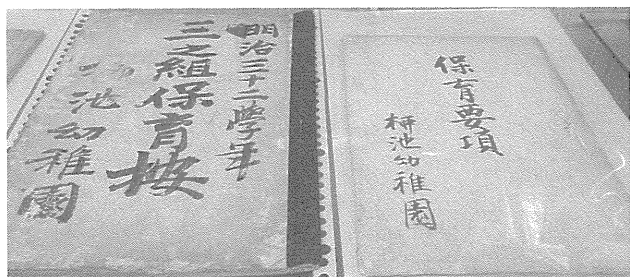
今号のレポーター

古賀松香

京都教育大学准教授。現場で子どもたちの姿を見ながら、保育者と共に保育を考え合うのが面白い！ そこから保育者の専門性を描きたいと奮闘中です。

京都市立中京もえぎ幼稚園なかぎょう（京都府京都市中京区）

京都市中京区は昔からの三世代同居家庭がありつつ、核家族の転入が増加している地域。子どもの心に向き合おうとする保育者の熱い思いが、現代の保護者と共に歩む中京もえぎ幼稚園の保育を創っています。



▲資料室にある明治期の史料

中京もえぎ幼稚園は、京都市の中心に位置する、中京区唯一の公立幼稚園です。六つの園を十年ほどかけて統合し、十六年前に中京もえぎ幼稚園として開園。統合前の幼稚園の一つ、柳池幼稚園は、明治八年開設の日本最

初期の幼児施設「柳池校附設幼稚園（稚）遊戯場」に端を発しています。東京女子師範学校附属幼稚園の開園が明治九年ですから、それより一年早い開設です。このことを村山（1960）は「きわめて長いあいだにつちかわれた

都びとの底力と文化的な教養が教育熱ということにあらわれ、そのあらわれの一端が幼稚園である」と述べ、その重要な意義を指摘しています。政府ではなく民衆の力によってわが国最初の小学校である柳池校とその附設幼稚園がつくられたことに、改めて京都市民の持つ地域の組織力、教育力を知る思いがします。

カレーパーティー

さて、訪問したこの日はカレーパーティーが開かれていました。幼稚園から出掛けていく畑「ほしファーム」で、五歳児たちが玉ねぎ六十四個、ジャガイモ三百六十一個も収穫！それを今日はみんなで調理します。

三歳児は「どこまでむくのかな？」と玉ねぎの皮むき。四歳児は「何かにおいがする」と、土の付いたジャガイモを洗います。五歳児は、三・四歳児がきれいに下準備した野菜



保育者やママ先生と
一緒に (3歳) ▶

◀ママ先生と
手元に集中! (5歳)



▲いただきます



▲友達と一緒に (4歳)



▲おおきいぐみさん、すごいな～

を包丁で切っていきます。
エプロンと三角巾をつけて調理する
「おおきいぐみさん」を、三歳児たちが興味津々で窓に張り付けて見ていました。

保護者と共に

この園に行くと、いつもどこかで保護者の方が行事の話し合い等をしています。この日は全クラスの各調理グループにお母さんが一人ずつ入り、子どもたちのサポート。保護者が保育に参加する「パパママ・ティーチャー」など、普段から積極的な保護者参加が多くあります。今日も自分の子を追いかけて写真を撮る人は皆無。園の子どもたちに目配り気配りをし、子どもたちが自分の手元に集中できる環境づくりを楽しそうにされていました。

「折り合う」心の研究

中京もえぎ幼稚園は研究モデル園としての役割も積極的に担い、昨年度までの二年間、「幼児が自己を発揮しながら人と折り合いをつけ、気持ちを調整する力が育つための教師の援助や環境のあり方を考える」という少々長いタイトルの研究に取り組みました。私はその研究に、ちゃちゃを入れる、楽しい役割を与えられ、時々遊びに行つては、保育後の振り返りに参加させてもらつていました。

私が初めて園を訪問したのは二年前の六月五日。もう六月だというのに、担任の半径一メートル以内でこわばった表情のまま何もできずにいる青白い三歳児、特にやりたいふうでもないのに砂場で泥団子を作り続ける四歳児、折り合うどころか激しく他者とぶつかり合うことでやっと自己を感じているような五歳児、と気になる姿を挙げればキリがありま

せん。この子たちが「自己を発揮する」「折り合いをつける」「気持ちを調整する」……何て難しいテーマだろうと思いましたが、だからこそ取り組み意味が大きく感じられたのでした。

人との間で折り合うとは、お互いの自己がしっかりと育っていなければ不可能なことです。私が衝撃を受けた子どもたちは「しっかりと自分のやりたいことがあり、自分の主張をしながら他者と出会っている姿」とは程遠く、まず子どもの自己を育てないと「折り合う」と言っても空虚だと、やっと進み始めた研究にちゃちゃを入れました。そこから保育者は、何が子どもの中で育っているのか、どのような関係が育っているのかをしっかりと見とり、丁寧に育ちを描くことを続け、骨太のエピソードが並ぶようになりました。そして、子どもの心をとらえようとする保育者のまなざしが支えとなり、子どもたちは「こん



▲パネルシアター、一緒に作ろう！

なことがしたい」「こんな物が作りたい」と遊びの中で自分の思いを持ち、表現し、伝え合い、ぶつつかっても乗り越えようとするようになっていきました。

「たけうまにのれますように」と書かれた七夕の短冊がありました。二年前、担任の半径一メートル以内で青白い顔をしていたトオルの短冊です。

入園当初は家庭でも園でもトイレに行ったことがなく、担任がトイレの方に行ったと思うと近寄れなくなり泣いてしまうといったふうで、排泄の自立も精神面での自立もしっかりと援助する必要がありました。「今、トオルがとらわれている不安は何だろう」と思いを寄せて抱きとめ、「大丈夫だよ」と何とか安心できるように支える日々。トイレ横の手洗い場で保育者とうがいをしたり、母親と一緒にトイレに入ってもらったりと、時間をかけて安心できる範囲を広げ、大好きな担任にはニコツと笑うようになっていきました。

四歳児の頃は友達のハルヤといつも一緒に。担任は大好きな友達と安心して遊ぶ姿とら

その研究紀要に『折り合い』には、常に幼児自身が、葛藤の場面で、自分はどうのようにしたいのかと自問自答し、自分自身と向き合うことが必要になることが分かった^{註2}とあります。今回の訪問日にも、子どもが自分に向き合うことができるよう、しっかりと支える保育者の姿がありました。

「たけうまにのれますように」

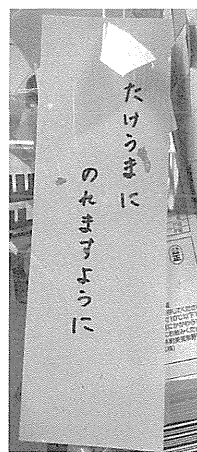
カレーパーティーの日、年長組に行くと、

え、支えました。五歳になり、リュウ、ハルヤと戦いごっこを毎日続けていたトオル。担任は次第に「トオルがやりたいことは何なのか」と引つ掛かるようになります。そんなある日、祇園祭ごっこの中にリュウとトオルが入って遊んでいました。担任は、今日は戦いごっこじゃない！と心に留めて保育をしていました。昼食後、トオルが自分から祇園祭ごっこに入っていくのを見ていた担任が後から様子を見に行くと、トオルはいません。周りの子に聞くと、「リュウがやるぞと言ったからやめていった」とのこと。担任はトオルを見つけて呼びとめ、「トオル君は何がしたいの？リュウくんがやるつて言っても、トオル君がしたいことをしたらいいんだよ」と伝えます。でも、トオルは言われたくないことを言われているといった感じ。気になった担任は、お迎えに来たお母さんに、今日あったこと、トオルに伝えたことを話しました。

数日後の日曜参観にはお父さんが参加し、竹馬作り。その次の日の朝、驚いたことにお父さんから電話が！先日担任がお母さんに話した内容を、お父さんも伝え聞いていたようです。そして日曜日に、友達について行くばかりのわが子の姿を見て、「自立した姿になってほしい」と思ったとのこと。電話で、「トオルに『自分で考えて、自分の本当にやりたいことをやりなさい』と話したので、今日はそんな気持ちで登園します。受けとめてやってください」と言われたそうです。その日、園の保育者全員がトオルに気持ちを向けて保育にあたりました。

朝、登園してきたトオルは誰に言われるでもなく、竹馬をやり始めました。通り過ぎる保育者は皆、トオルが自分で決めたことをやるうとしてる姿に「自分で考えててすごい」と喜びを伝えます。

でも竹馬はそんなにすぐには乗れません。



▲自分に願う短冊

「たけうまにのれますように」は、トオルが初めて自分に願った思いだったのではないかと、私は短冊を見て胸が熱くなりました。

竹馬を通して自分を知る

カレーパーティーの後、トオルは竹馬を持ち出し、足を掛けました。乗れるようになって他の子の様子をジッと見ています。

そこに教頭先生がタイミンクよく通りかかりました。三歳の頃からずっと見守り続けて、やっと自分の足で立とうとしているトオルに心から喜んで声を掛けます。「持つてるから乗ってごらん」と教頭先生。足を乗せ、ぐつと体重を前にのせ、歩きだしました。

その後、トオルの大好きな担任も来て、竹馬を支えます。「あつちの端っこまで行く」と遊戯室横断をトオルが宣言すると、担任は笑顔で応えます。トオルは、必要なだけの支えで遊戯室の端まで行き切りました。ふう、と床に降りて座ったトオルの顔には、これまで見たことのない充実感があふれていました。

大人全員が「この子の今」に向かう

私は、トオルがやりたいこと、本気で楽し



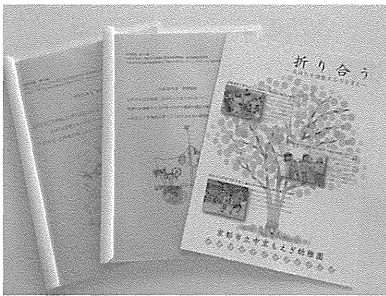
▲竹馬

いと思うことは何だろう、とずっと引っ掛かり続けていました。でも保育者は、トオルが自分と向き合う力をつけるまでじつくりと待ち、その時が来たら全力で応援していったのでした。

園内の全保育者だけでなく保護者も巻き込んで、皆がトオルの今を応援する。それは他のどの子の発達の危機の時と同じです。この子の今に熱い思いを持つ保育者が語るからこそ、保護者の心が動き、わが子をよく見るようになり、共に感じて動いてくれるようになる。そんなことが起こる、思いあふれる幼稚園。それが中京もえぎ幼稚園です。



▲竹馬楽しいね



引用文献

- 1 村山貞雄「わが国最初の幼稚園と京都の雰囲気」『幼児の教育』第五十九巻第九号 フレーベル館 一九六〇年 pp.56-57
- 2 「幼児が自己を発揮しながら人と折り合いをつけ、気持ちを整える力が育つための教師の援助や環境のあり方を考える」もえぎ幼稚園研究紀要第10集 二〇一五年

— 訪問メモ —

訪問時期：2015年7月

訪問場所：京都市立中京もえぎ幼稚園

〔住所〕京都府京都市中京区間之町通

竹屋町下る楠町 601-1

〔電話〕075-254-8441

イメージを重ねて

三宅智子
(幼稚園教諭)

私は大学卒業後、東京都の公立幼稚園で働いており、今年度は三十五人の元氣いっぱいな年長組の子どもたちを担当しています。年長組に進級し、新入園児も加わってスタートした一学期。その中で子どもたちが繰り返し楽しんだ遊びの一つだった「リニアモーターカー」の遊びを振り返ってみたいと思います。

リニアモーターカーが作りたい

「大きい電車が作りたい。本当に走るようにしたいんだ」とA児が言いに来ました。「僕も！」とB児も一緒です。「どんな電車にした

いの？」と聞くと、「リニアモーターカーがいい」とA児が答えました。そこで、三人で図鑑で探してみることにしました。A児は電車のページの中からすぐに見つけ、「あったあつた！ すごく早んだよ」と指さして説明を始めました。B児は、図鑑を見ながらA児の熱い説明を聞き、「かっこいい。いいね、これにしよう」とうれしそうにしています。「何で作ろうか？」と聞くと、「タイヤを付けて動くようにしたい。材料の部屋にあるのを使う！」とのこと。教材室にあるキャスター付きの平板（台車）を、昨年度の年長組が使っている

のを見ていたのだと思います。そこで、まず車体を段ボールで作ることにすると、はけを使って張り切つて絵の具を塗つていきました。

次の日、登園すると「乾いたかなあ？」と真つ先に段ボールを見に行つたA児。A児とB児の他にC児とD児も加わり、私も仲間となつて一緒に考えながら組み立てていきました。段ボールを台車に固定し、先端部分は斜めにとがるようにしました。「ここにはライトを付ける」と黄色く塗つたカップを貼り付けたり、「青いテープがいい」とラインは本物のように青くしたりして、リニアモーターカーが完成しました。出来上がると早速乗り込み、代わる代わる引つ張り合つて遊びだしました。

帽子を作らなきや

しばらくすると、遊びを始めたメンバーだけでなく、学級の友達も興味を持つてかかわ

る姿が多く見られるようになってきました。中心となつているのはA児、C児、D児で、毎日のように遊んでいます。学級の前の廊下にビニールテープで線路を作り、駅名が書いてある看板や、踏切、洗車場など、子どもたちのアイデアでいろいろな物ができていきました。リニアモーターカーが近づくと開く踏切を通つて、青い半透明の梱包用テープで作つた洗車場を最後にくぐつて次の駅に向かうというコースも、繰り返し遊ぶ中で決まつていきました。駅の近くで、「乗りながら食べられます」と、女の子たちが開いたハンバーガー屋さんが始まる日もありました。肌色の折り紙の中に丸めた新聞紙を入れてパンを作つていくのですが、新聞紙を丸めていく手つきは本当にパンをこねているようです。一つの遊びがきっかけとなつて、イメージが膨らみ、遊びが広がっていきました。

ある日、「先生、帽子の作り方教えて」と、A児がD児と一緒にやって来ました。帽子というのは、運転手の印としてかぶっている、紺色の画用紙で作った帽子のことです。「うん、一緒に作ってみよう」と画用紙を折って一緒に作ることにしました。A児は以前一度作っているのので、D児に教えてあげています。D児が帽子をまだ作っていなかったことに気が付き、二人で作りに来たようでした。形が出来る上があると、「ここに電車の絵を描いて貼るんだよ」とA児。D児は自分で描いた絵を貼るとうれしそうにかぶり、二人でリニアモーターカーの所へ戻り、再び遊びました。A児の友達に対する優しさや、仲間とのつながりを感じながら遊びを楽しんでいる姿をうれしく思いました。

旗が上がったら出発ね

リニアモーターカーを廊下で走らせながら

遊んでいると、隣の年中組さんが段ボールを引いてやって来ました。段ボールには引つ張れるようにひもが付き、側面にはクレヨンで模様が描いてあります。C児が「ここはリニアモーターカーの線路だからだめ」と言うと、リニアモーターカーをじっと見ています。私が「年中組さんも乗りたいのかな」と言うと、「乗るのならないよ」と、保育室から椅子を持ってきて駅に並べ始めました。やって来た年中組さんも、早速椅子に座っています。線路をぐるっと回り、次の駅に着いたら、次のお客さんと交代するというコースです。うれしそうな年中組さんを見て、A児も引く手に力が入るようでした。私が言葉を掛けると、乗る時には車体を押さえてあげたり、ゆっくり引つ張ってあげたりと、相手の動きを見ながらかわる姿も見られました。お客さんは途切れず、順番に乗せてあげて遊んでいると、C児が思い付いたかのように、急いで保育室

に入り、製作コーナーで何かを作りだしました。しばらくして戻ってきたC児の手には、画用紙を丸めた棒に赤い京花紙を付けた旗が握られています。それをD児に渡すと、「これが出発の合図だからねー」と勢いよく話しました。聞いていると、その旗を上げたら、線路の安全が確認できたという印だ、ということでした。手作りの棒を持って交通整理をしているC児の合図を見てD児が旗を上げ、A児が引く張る、という流れをC児は考えたのでした。D児は「わかった!」と言って、C児を一生懸命見ながら旗を上げました。それを見て出発するA児。時々お客さんのことを忘れてしまっているのでは、というほど、互いの動きをよく見ていました。片付けの時間になる頃には汗びっしょり。「大人気だったね」と話をしながら、満足そうに車庫にリニアモーターカーを停車させていました。

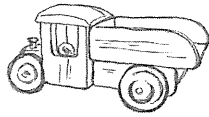
年少組の時から、作る楽しさ、作って遊ぶ楽しさの経験を重ねてきた子どもたちは、作って遊ぶことが大好きで、毎日いろいろな物を作ってはイメージを膨らませて遊んでいます。年長組になり、物や言葉を媒介にしなから、友達とイメージや目的を共有しながら遊ぶことを楽しむ姿も少しずつ見られるようになってきました。今年は学級編成替えがあり、新しい友達との出会いもたくさんありました。それぞれが遊びを楽しみむ中で、友達とのかわりを広げていく姿が見られています。

子どもたちと過ごす生活は毎日が驚きや発見の連続で、子どもたちの豊かな感性や、真つすぐな気持ちに触れ、心が温かくなります。子どもたちの気持ちに寄り添いながら、一人ひとりの育ちにつなげていけるように、これからも学び続けていきたいと思います。



母になるといふことその4

郡司明子
(大学教員)



昨年八月の出産から再び暑い夏が巡ってきました。今回でこの連載も最終となり、一生の宝物ともいえる育休期間も残りわずか。一年を経ると、Yが生まれて間もない頃に感じていた神聖な領域から、母子共にずいぶんと俗世に降りてきた感があります。今や、Yは自力で歩行し、他者やモノに積極的に働きかけたり、やりとりを楽しんだりするようになってきました。では、Yの9か月頃からお誕生日を迎えたあたりのことを紹介します。

301日目…寝顔

Yに限らず最近の赤ちゃんはまつ毛が長い、と思っただ。それだけ世の塵が多いということか。せめて世の中の動向(善悪)を確かな眼で見抜けるよう、自分の目は自力で守っておくれ、とそのまつ毛に願いを託す。Yの寝顔を見ながら願う。



郡司明子(くんじあきこ)
群馬大学准教授。専門・美術科教育。小学校教諭を経て現職。身体性を重視したアート教育を実践研究中。

324日目：Yの遊び場

大人が入れるほどの大きな段ボールに大中小の段ボール箱をぎっしり詰めて、

それぞれの箱の中には、わが家に届いた荷物の緩衝材

や梱包材、ロール紙などを種類別に入れておく。

Yは好きな箱を引っ張り出して、中身も心ゆくまで出し切って、あるいは大きな段ボールごと部屋の中を引きずり回し、全身でモノに働きかける。形あるモノとからだとの対話。

ほんと、一瞬
立ち止まよ!
ママ見てた?
314日目 Y



330日目：初発熱

Yの様子がおかしい。買い物帰り、抱っこのままぐったりとしている。からだ全体が熱い。慌てて体温を計ると三十八度七分。これ

は大変! と、まずは水分

補給。そして、冷蔵庫にある

キャベツや菜っ葉を刻んでこしらえた青菜の枕に寝

かせて様子を見ることに。

その後もたっぷりの食事と

睡眠を繰り返し、しばらく

すると体温は三十七度台に。

この日はYの発熱記念日。

354日目：歩いた!

8歩、トットツとつと、

とつ。そして歓喜に包まれる

わが家。つかまり立ちから

伝い歩き、最近急激に進

歩した立っちからの歩行。

その時々には確かな準備があ

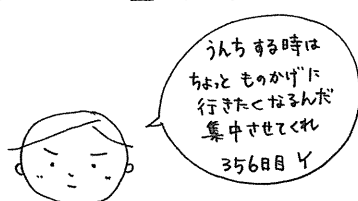
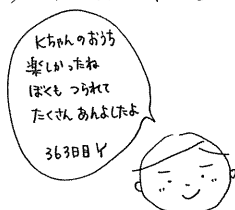
って「いま」がある。

飲みたい、食べたい。
あめほしい、これとて。
言いたい時は
みーんな「あはーい」
334日目 Y



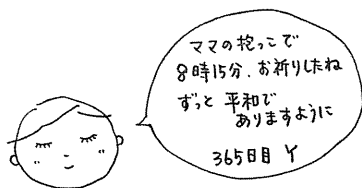
364日目：おつきあい

描画活動に関して、もの本には一歳前後から始まる、とある。Yもそろそろかと、たびたび描画材を整えその場を用意するも、一向に興味を示さず、クレヨンには口に入れてしまうばかり。それでも目の前で描いてみせ、ほら、と差し出すと、「しょうがないな」と言わんばかりに右手で石ころ型のクレヨンを持ち、軽く左右にシャカシャカシャカと動かし、次の瞬間にはフーッと別の遊びへ。記念すべき初描画はYの完全なるおつきあいだった。



365日目：お誕生と日々の記録

この日でYは一歳。母親も父親も同じく一歳。しみじみと新しい家族の一年間を振り返る。というのも日々の記録があつてのこと。Yが生まれた日から、一日一枚、インスタントカメラでYをめぐるあれこれを撮影し、コメントを付してファイルにつづってきた。写真の隣にはY目線のつぶやき（本稿の挿絵吹き出しにも登場）。365日分の記録は、確かにYとYを囲む人やモノがその場に存在し、日々息づいていた証としての集積となっている。

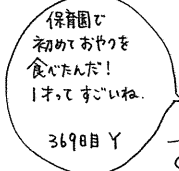


371日目：手づかみと造形活動

Yが手づかみで食べる様子は、まるで造形遊び^{注1}だな、と思う。つかむ、握る、垂らす、広げる、まみれる……。ちっちゃな手を駆使して食材という素材と懸命に向き合うその姿に、人の造形活動の原点に触れる思い。ひとたびおなかが満たされると、豆腐は、その弾力を指の腹で確かめるようにして、感触を味わう。サツマイモ、しっかりと握りしめ、にゅるっと手の中から出てくる瞬間を楽しむ。ヨーグルトが入った器の中に手を伸ば



パパとママが
もめてる時は、一応
両方の味方をいいる
けい、気を使う……
371日目 Y



保婦科
初めておやちを
食べたんだ！
1才、すごいね。
369日目 Y



し、その手でテーブルの上に左右の動きを繰り返す。あつという間に白いフィンガーペインティングの世界が広がる。自らの働きかけで素材が変容するさまに感じ入るY。モノ（素材）に呼びかけ、モノからの応答に耳を傾ける。まさに造形遊びの真髄。……ではあるけれど、何を言っても何を言ってもお手上げの時に、いつそのこと私も楽しむしかない光景。

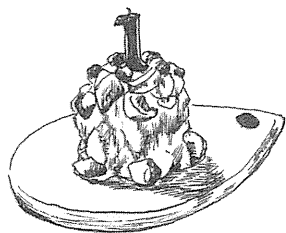
379日目：ライフ×アート展

人のライフ（生・生活・人生）に生まれるアートを、多角的にとらえ表現する展覧会に参加することに。私は、Yとの生活（遊び）から生まれたミニペットボトルを展示した。生活の中で心ときめいたモノや、Yに出会ってほしいモノなどを詰め込んだ百八本。人は生まれると同時にちゃんと欲求があつて、身体機能の拡張とともに自らの世界を広げ、同時に意欲（欲求）も限りなく高まりゆくけれど、百八（煩惱の数）を節目として、この世界の魅力を可視化してみたらどうなる？ という問いから出発した作品。その結果、「美しいものとして世界を『見る』。美しくなる可能性を世界に『見る』。そして、少しの工夫次第で世界を美しく『する』^{注2}」。「このことを自らの手で実感。そして、手元から社会につながる展覧会という場を通じて大事なこ

とに気付かせてくれたYのいる生活に感謝。
おしまいに

出産から一年、果たして私は母親になれたのでしょうか。時折「Y君のお母さん」と声を掛けられると、いまだにこそばゆい思いをします。でも、Yがいることで母親としての私が存在する。深夜、こうして原稿を書いて、泣きの深淵にいるYを救い出せるのは、ほかでもない母親のなせる業といえましょう。

――終わり――



▲ 1歳のバースデーケーキ

1 注

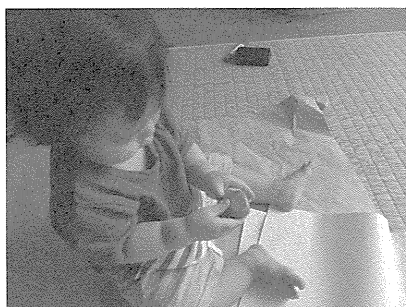
小学校学習指導要領における図画工作科の内容に、造形遊びをする活動を通して行う指導事項がある。

2

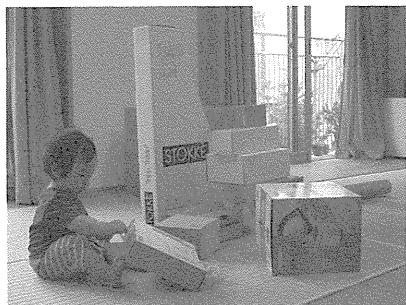
佐伯胖「子どもが『アートする』とはーレッツ
ジョ・エミリアの幼児教育から学ぶ」『教育
美術』二〇一二年九月号 (No.83)



▲ライフ×アート展の様子



▲クレヨンを持つY



▲段ボール箱で遊ぶY

子どもは豊かな遊びの世界を生きている④

子どもが遊ぶということ

河邊貴子

(大学教員)

どうしたら氷が溶けるかな

「凍ったペットボトルのジュースを五分間で溶かしてみよう」

前回にも取り上げた遊びの会でのこと。だいたいの年齢ごとに分かれたチームに一本ずつ、凍ったペットボトルが渡された。「溶けた分だけ飲んでいいよ」と言われたのだから、燃えないわけがない。小学校高学年の女子チームは、厨房に飛んでいつてお湯をもらってきた。さすがである。さて四歳男児ケイゴ・ソウタ・アキラの三人組は、どう行動したと思いますか。

ケイゴ君はまずボトルを座布団の上に置いて「溶けますように」と祈った。次にソウタ君はそのボトルに片手でチョップ。「カタッ」と叫び、手では無理だと思ったのか、おもむろに壁にぶつけようとする。慌てて止め、「どこかにぶつけないなら建物のコンクリートの壁で試してみたら」と提案する。外に出た三人は順番に野球バットよろしくボトルで外壁をたたいたが、壁の上方にセミの抜け殻を発見して大騒ぎ。外壁たたきの目的は氷を壊すためではなく、セミの抜け殻を落とすためにと変化した。しばらくそうしていたが、抜け殻は落ちてこない。他のチームに知らせ

河邊貴子（かわべたかこ）

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐNPO活動もライフワークの一つ。

に行ったけれど、みんな氷を溶かすことに夢中で関心を示してもらえない。諦めたのか、自分たちの使命を思い出したのか、今度は洋服の下にボトルを抱えて走り回るというアイデアがアキラ君から出され実行する。これには「冷たくて気持ちいい」という発見がついてきた。それでしばらくは順番に首筋や肩をボトルでトントんとたたいて大騒ぎ。

ちょうどその時「あと一分です」の声が掛かった。再び彼らの目的は「氷を溶かすこと」に引き戻され、今度はただ走るより走りながら落とそうとケイゴ君。だったら投げ上げて地面に落とそうとソウタ君。アキラ君が投げ上げたボトルが自分に当たりそうになってまたまた大騒ぎ。このようにしてタイムアップまでの間に考えた作戦は十個にも及び、そのすべてが実行された。

結果は、当然のことだけれど、高学年チームが一番多く溶けていた。しかし作戦の数からいえば幼児チームが抜群に多かった。しかもそれなりの成果も上げ、紙コップの底に一センチずつくらのジュースを、他チームに比べて少なかったにもかかわらず、満足そうに飲みほした。

このあと、チーム対抗の水掛けごっこをしたのだが、三人組は用意された多くのバケツの中から、他のチームが「クサイ」といって敬遠した梅干しが漬けてあったという容器をわざわざ選んだ。理由は「この中に水を入れると、水が『スッパイパワー』で最強になる」からなのだろう。私は三人の行動の一部始終に寄り添いながら、改めて「幼児」と呼ばれる人たちの思考と行動の面白さに魅了されていた。

幼児の遊びの真骨頂

幼児チームが他チームと異なっていた点は、まさに幼児の遊びの真骨頂というべきものだと思う。

う。第一に、目的に向かつて一直線には進まない。大人だったら、氷を溶かそうと決めたら、その一点に注意を集中するだろう。けれども彼らの注意はどんな時にも全方向に向けられていて、セミの抜け殻を発見したり、氷のヒンヤリした感触が楽しくなったりする。どう投げ上げたら自分に当たらないかということまでもが遊びになる。目的には一直線に進まず、過程で起きるさまざまな出来事にも心を留めて、あつという間に夢中になるのが幼児。

それを「注意散漫」であるとか、「興味の持続時間が短い」とマイナスにとらえることは間違っている。それが彼らの思考の方法であつて、全方向的にアンテナを張り巡らせて、大人から見ればつまみ食いのかかわることをしながら、頭の中に何かしらのマップを作っているように思う。だから、何かを教え込んだり、結果を求めて効率の良い方法を教えたりすることは、とてもなく大事なものを彼らから奪うことになる。

もう一つは、幼児は想像を膨らませて目の前の状況がより面白くなるようにイメージを増幅できることである。座布団の上のボトルに祈りを込めれば、確かに少し溶けたように見える。梅干しの香りがする容器にためられた水には確かにパワーが宿る。そんなふうに想像を広げること、出来事は一気に楽しくなる。

だから、飲めたジュースの量は少なくても、主体者としてプロセスを含めて楽しめる。こんなところもちがあれば、人生は豊かになるに違いない。

遊びこそ学び

「赤ちゃん研究」で著名な心理学者のアリソン・ゴプニツクは、大人に守られて過ごす幼児期と

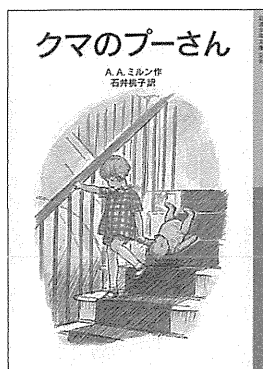
は、自分と世界を変革する決定的役割を果たす時期だという^注。私たちの脳には、赤ん坊のうちから実験と統計的分析をするプログラムがあり、遊びながら無意識のうちにこのプログラムを使つて、世界を表す因果マップを少しずつ作り変えているという。だから、大人は子どもにお仕着せのプログラムを与えるのではなく、自由に遊びながら学ぶことを守る必要があると指摘する。

確かに三人組の行動を振り返ってみれば、彼らの試行錯誤は、決してアテズツポウではなく、「氷が溶ける条件」をそれなりに押さえた仮説に基づいていた。すなわち、衝撃を加えて何と氷の塊を小さくしようとするのと、温度を加えて溶かそうとすること。そして例えば「ボトルを洋服の中に入れて走る」の次が「走りながら落とす」というように、友達の仮説の上に自分の仮説を加えるようにして試していた。そうしながら頭の中の因果マップを作り変えているのだから。しかも、一見、脇道にそれたかのように見える行動をとりながらである、

連載の最終回にあたって私は声を大にして言いたい。

子どもの遊びは、そこに価値を見いださない大人が見れば無益に見えるけれど、子どもの中に積み上がるものを理解しようとすれば、遊びの宝庫であることがわかる。そして、遊びの中での学びは、私たちの一生を支える力になる。だから、大人は子どもの育つ力を信じて、子どもの遊ぶ権利を守ってやろう。子どもが遊びだすには「安心」と「安全」が大切である。すべての子どもたちが心ゆくまで遊べるよう、さまざまな立場の大人が手を携えて適切な環境を考えていこう。

—終わり—



『クマのプーさん』 岩波少年文庫 008
A.A. ミルン作 石井桃子訳
(岩波書店 2000年)

ウィニコットと 「クマのプーさん」

評者 井原成男
(大学教員)

ウィニコットとフロイト

イギリスの児童精神分析家であるウィニコットは、フロイトの創始した精神分析に、①「生き残ること」という、育児にとっても示唆を与えるコンセプトと共に、②「中間領域」というアートの示唆的なコンセプトを付け加えました。①は親が自分自身を破壊せず、他者としての子どもをも破壊しないで生き残ること、②は、子どもが心の中の世界から、外の客観的な世界へと超越し、やがて内的にも外的にも確固とした世界をつくっていくために、内と外をつなぐ役割を果たす領域として、やがてアートや哲学などに進化していく領域のことです。

クマのプーさんとアート

このアートの一つとして「クマのプーさん」を取り上げます。

井原成男（いはらなりお）
お茶の水女子大学教授。

クマのプーさんについて見ていく時、私たちは、プーさんの物語のみでなく、登場人物であるクリストファー・ロビンと、作者でありロビンの父であったミルンのことも考えていくべきでしょう。クマのプーさんの原型であるデディ・ベアというのは、どんなクマなのでしょうか？

ミルンの児童詩集である『ぼくらが小さかった頃 (When We Were Very Young)』にデディ・ベアが出てきます。ベッドから落っこちたデディ・ベアと、男の子のベッドに寝ているデディ・ベアが描いてあります。「デディ・ベア (Teddy Bear)」という題がついています。この詩集が出たのは一九二四年で、『クマのプーさん』の出る二年前です。この頃はまだクマのプーさんにはなっていない、ただのデディ・ベアです。ただのぬいぐるみであるデディ・ベアが、どんな過程を経て「プー」になっていくのでしょうか。

この同じミルンの詩集の中に、「階段の途中で (Halfway Down)」という詩が出ています。階段の途中に座っているロビンの後ろにいるクマは、まだ、ただのぬいぐるみですが、もう半分うす目を開けていて、きつと将来は「プー」になっていくのではないかと期待を抱かせます。

この詩集の後、第二詩集として、ミルンは一九二七年に『そして、ぼくらは六歳になった (Now We Are Six)』という詩集を出します。ここでは、デディ・ベアは消え、プーが登場しています。

「ぼくたち二人 (Us Two)」という詩の中では、もう二人は大の仲良し、生きた二人として付き合っています。挿絵の下に書いてある詩句を見ると、プーという名前が出てきます。「ボクがいるところには、いつもプーがいる」と書いてあります。親友になっているのです。

ただのぬいぐるみのクマであったのが、ここでは、自分で階段を上ってロビンの後を歩いていく、生きたクマになっています。

二人のロビン

ミルンの息子のクリストファー・ロビン、つまり実生活のロビンはどんな子どもだったのでしょうか？ ミルンは、自分の息子がテイ・ベアと遊んでいる様子を見て、クマのプーさんの物語を空想していきました。

ロビンを育てたのは「ナニー」といって、乳母と看護婦の役目をして、子どもを母親に代わって育てる人です。この頃のイギリスの上流階級の人は、自分で子どもを育てない。成功した作家の息子であるロビンもそうでした。彼は、このナニーにとってもなついていて、夏、海水浴に出掛ける時も、ナニーが行かないのなら行きたくないと言っています。彼自身、のちに自伝の中で「私は、どこまでもナ

ニーの子で、九歳までそうだった」と書いています。

ナニーは、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年、彼は寄宿舎に入ります。ロビン自身、「ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった、そしてクマのぬいぐるみは、そのナニーの代わりだった」と言っています。決して母親の代わりでなかったというところがロビンの二重に悲しいところだと思っています。

中間領域としての「百エーカーの森」

ところで、クマのプーさんの物語世界（中間領域）の中で展開されるテーマはどんなものなのでしょうか？

この世界（「百エーカーの森」）では、みんなとても親切です（この森は現在でも当時のままに残され、保存されています）。とても根暗のロバのイーヨーでさえ、ちゃんとプレ

ゼントをもらえる。誰も切り捨てられない、そんな母性的で、守られた、しかも自由に融通無碍な世界です。プーさんの中で私が最も好きなのは、はねつかえりのトラーですが、この虎はいつもハネつかえていて、いたずらものです。ところが、このトラーは最初から元気だったわけではない。このトラーにはお母さんがいないのです。このトラーが何を食べるのか？ プーたちは一生懸命探してあげます。

ハチミツもドングリもアザミもだめ。結局、トラーが食べられるのは、カンガのとこの赤ん坊のルーが食べる、麦芽エキスという離乳食だったのです。フロイトのいう口唇期を思い出してください。トラーは大きそうに見えるけれど、実はまだ赤ちゃんだったというところが、とても面白い。心理療法では心の傷ついた子どもをいやすために、いったん、その子の赤ちゃん返りを許容します。そうする

ことによって、その子はまた力を得ることができるのです。

分離不安と生き残ること

やがてロビンは九歳になり、寄宿舎に入り、子ども時代に別れを告げるために、プーとお別れします。二人が別れ、そして百年たってもここに来たらいつでも会えるという固い約束をした場所は「ギャレオン凹地」といいます。この場所からの別れは感動的に次のように書かれています。

「『プー、ぼくのこと忘れないって約束しておくれ、ぼくが百歳になっても！』（中略）そこで二人はでかけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその子のクマがいつしよにあそんでいることでしょう。」

この「ギャレオン凹地」というのは一体どこなのでしょうか？

それはその後のプーの運命によって明らかです。プーはアメリカ旅行に出掛けます。クマのプーさんの物語があまりにも有名になり、このぬいぐるみを一目見たいというアメリカの少年少女の熱望に応えたのです。この際ミルンが出した条件は、ぬいぐるみのプーがいくら汚れても決して洗わない、というものでした。プーは今でもアメリカのダットン社の陳列棚の中に陳列されています。プーのぬいぐるみに会いたくないか、というインタビュに答えて、今や大人になったロビンは、こう言いました。

「平気です。愛情はいつも自分の心の中にあります」と。

私たちは、ある対象との愛情をイメージとして内面化できてはじめて、ぬいぐるみの世界から旅立っていただけるのだと思うのです。こ

の内面化された場所がまさに「ギャレオン凹地」なのです。

中間領域と生き残る人々

このように見えますと、クマのプーさんは、ロビンという少年が、実際のティ・ベアを使って、プーという物語（＝イメージ世界）の中で、プーとの二人の世界をつくりあげてそこから抜け出していく。まさにこれは、ぬいぐるみとその運命を、子どもの内面からとらえた物語なのです。

そして、この場所こそが、ウイニコットのいう②の「中間領域」であり、この領域は、それが本当にリアルなことなのか、フィクションであり、作り事のファンタジーなのかを問われない、中間領域であり、ギャレオン凹地というこの場所に守られて、ロビンは大切なナニーと別れ（それはプーとの別れという形を取っていますが）、その一大事から①生

き残り、やがて来る寄宿舎の生活を迎え、そして大人になるという、どの子どもであれ、いや応なく適応していかなければならない③分離、そして分離不安という一大事を越えていくのです。

おわりに

ウィニコットは、その学問的基礎と訓練をフロイト、正確にいうと、フロイトの心理的現実という考え方をさらに精神内界主義としてラディカルに推し進めたクラインから受けましたが、やがてそこから離れ、「生き残ること」や「中間領域」というコンセプトによって、外的世界という、子どもにとっては母親（あるいは母親代理としての養育者）との関係性を明示化し、それを治療論や育児論にまで推し進めました。

そのことによって、自分自身を知れば自然に、環境や世間の側が手を差し伸べるという

素朴な治療観では立ち行かなくなっている、現代の状況下で求められる、真の治療的コンセプトを、期せずして構築したのです。

参考文献

- 1 井原成男『ウィニコットと移行対象の発達心理学』福村出版 二〇〇九年
- 2 Milne, Alan Alexander. (1924) *When We Were Very Young*. (1926) *Winnie-the-Pooh*. (1927) *Now We Are Six*. (1928) *The House At Pooh Corner*
(日本語訳には、本稿冒頭表紙絵の岩波少年文庫シリーズのほか、
A. A. ミルン作／E. H. シェパード絵『クマのプーさん全集―おはなしと詩―』(石井桃子・小田島雄志・小田島若子訳) 岩波書店 一九九七年 などがあります。)

1.....7.....28

幼児の教育

アーカイブズとの対話③

56.....109・110

画像にみる「幼児の生活」(3)

— 四十年前の子どもたち (昭和五二年) —

浜口順子

(大学教員)

現在、本誌の口絵で「子どもの情景」(保育者による撮影)が連載されているが、戦後、鈴木孝雄、平野清などの写真家による作品がコーナーで連載されたことがある。

西本真の「子どもたちの世界」シリーズ(昭和五―五二年)では、舞台はこの幼稚園か不明だが、けんかしたり、退屈そうにしていたりする様子も含め、何気ない日常的な子どもの姿が写し出され、「作品」と「記録」の間のような印象がある。

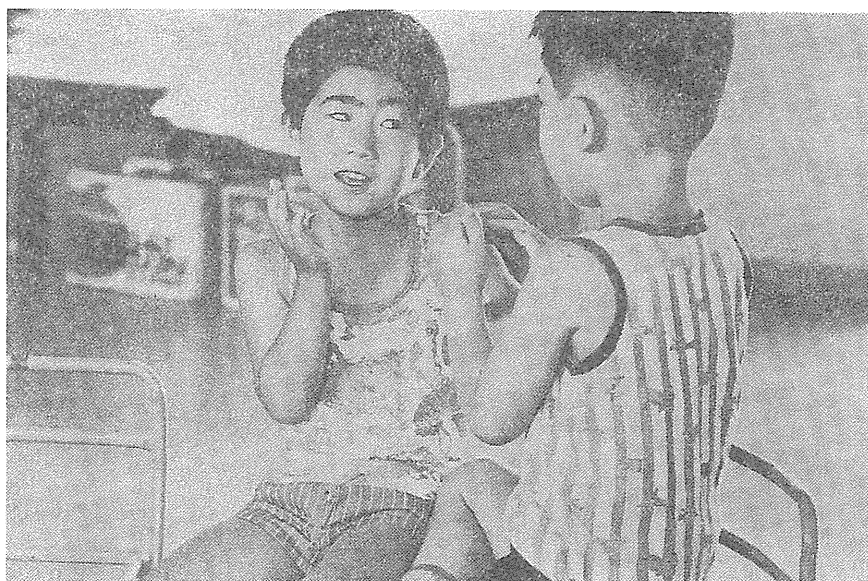
いがぐり頭の半ズボン、ハイソックスの男児。ジュースのスチール缶を積み上げて楽し

む女兒たちの髪は短め。他の写真を見ても、今よりもショートヘアの子が多そうだった。野球帽の男児の胸には「GIANTS」。いかにも昭和らしい。

この子どもたちは、昭和四十年代後半、第二次ベビーブームのただ中に生まれている。合計特殊出生率は2.1台。

現代の子どもよりもたくましそうに見える。しまうのは、単なるノスタルジーだろうか。今ごろは、四十歳代前半の働き盛り、親になっっている人も多だろう。

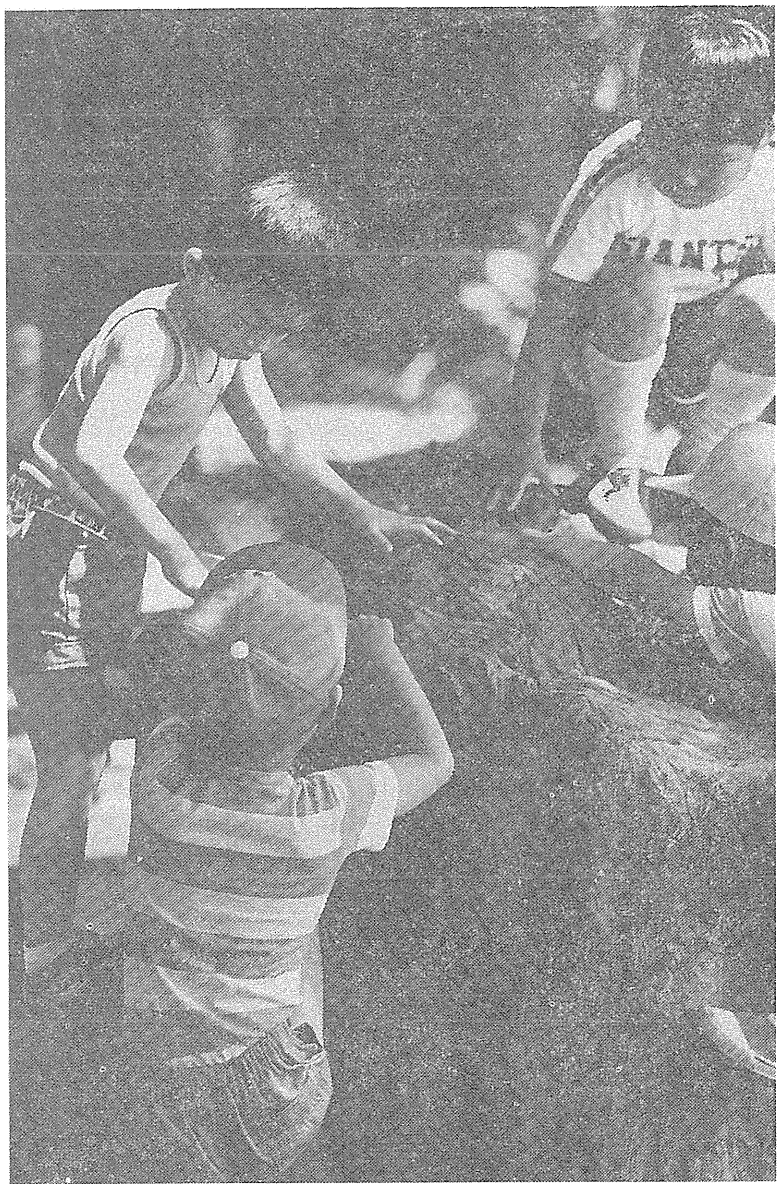
浜口順子(はまぐちじゅんこ)
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。



▲「あっ、」(『幼児の教育』第76巻第10号／1977年)



▲「いったな!!」(『幼児の教育』第76巻第10号)



▲「猿山？」より（『幼児の教育』第76巻第9号／1977年）



▲「カンカラ」より（『幼児の教育』第76巻第7号／1977年）

講演

お茶の水女子大学ECCCEL 第三回保育フォーラムから

高橋清賀子氏・大戸美也子氏

「幼稚園草創期の保育者に学ぶ」

—— 初代保姆 豊田芙雄の挑戦」(2)

構成／安治陽子
(大学教員)

前号に続き、二〇一三年十一月十六日（幼稚園の日）に開催された、お茶の水女子大学の教育研究プロジェクトECCCEL^{*}主催の保育フォーラムについて、その後半の内容を報告する。

大戸美也子氏（武蔵野大学名誉教授）に、幼稚園草創期における豊田芙雄ら保育者の挑戦と、それを現在および未来の保育へとつなげる視点について論じていただいた。

^{*}文部科学省特別経費「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業。リーダー：浜口順子教授。

大戸美也子氏講演

「豊田芙雄 幼稚園教育への挑戦」

この写真は、二〇一二年茨城県大洗町で開催された企画展（前号参照）のポスターに使われた写真で、芙雄が幼稚園の仕事を始めた三十歳の頃のものである。当時、水戸藩の重臣の一族に連なる芙雄は、開明派の夫の暗殺に続いて、叔母一族が藩内の抗争に巻き込まれ、幼い子どもたちを含めて全



安治陽子（あんじようこ）

お茶の水女子大学人間発達科学研究所特任講師。

員が処刑されるといふ、考えられないほどの身内の不幸を浴びている。そうした苦しみをのみ込んで、幼稚園という未知なる世界へ挑む覚悟が感じられる、そういう面構えの写真である。

英雄の生涯において、幼稚園教育時代は実は短く、九年半ほどである。四十歳で外国へ行き、五十歳から八十歳まで女子高等教育に携わるが、英雄は短い幼稚園教育時代に実に

多様な体験をしたと言える。わが国初の幼稚園を開設することは、いわば「ナショナルプロジェクト」への参加であり、英雄はその推進者であった。開設直前の一八七六(明治九)年十一月四日〜一八七七(明治十)年三月十七日までの四か月について『幼稚園日録』(左上図)が残されているが、「学びつつ教える」前向きな様子が読み取れる。

1 幼稚園教育への三つの挑戦

英雄は、幼稚園教育時代に、大きく三つの挑戦をしたと思う。

一つは、幼稚園「教育理解」への挑戦。当時の日本には、就学前の子どもたちを親元から離して一か所です一定時間指導するという前例がなかった。就学前の子どもたちを指導するとはどういうことなのか、幼稚園教育を理解することが最初の挑戦であつたと思う。後で詳しく述べる。

幼稚園日録	
明治九年 十一月	十一月一日 晴 本日假り当園へ移る
四日 晴	本日假り当園へ移る
五日 晴	晴 二休
六日 晴	先生来
七日 晴	先生来
八日 晴	先生来
九日 晴	晴 朝霧初寒
十日 晴	晴 霧 先生来
十一日 晴	晴 先生来
十二日 晴	晴 先生来
十三日 晴	晴 先生来
十四日 晴	晴 先生来
十五日 晴	晴 先生来
十六日 晴	晴 先生来
十七日 晴	晴 先生来
十八日 晴	晴 先生来
十九日 晴	晴 先生来
二十日 晴	晴 先生来
二十一日 晴	晴 先生来
二十二日 晴	晴 先生来
二十三日 晴	晴 先生来
二十四日 晴	晴 先生来
二十五日 晴	晴 先生来
二十六日 晴	晴 先生来
二十七日 晴	晴 先生来
二十八日 晴	晴 先生来
二十九日 晴	晴 先生来
三十日 晴	晴 先生来
三十一日 晴	晴 先生来

二つ目は、実際に教具を使って子どもたち
にどう指導するか、幼稚園「教育実践」への
挑戦である。当時、教育といえば「読み・書
き・算術」の世界であり、遊んだり歌ったり、
お遊戯をすることが幼稚園指導の中身となる
と、遊びに使う物も、皆で唱和する歌も、無
い物尽くしであった。例えば、折り紙など、和
紙を自前で染めて手技用の教材とし、歌は既
存の歌詞を改訳して「保育唱歌」を開発、伴
奏楽器も琴や笛、雅楽の笙しやうを活用するなどし
て柔軟に対応した。保育の現場で子どもたち
と遊び、歌うだけでも、そこにはさまざまな
工夫が求められたのである。

三つ目は、それら指導法を後進に伝えるこ
と、幼稚園「教育伝達」への挑戦である。幼
稚園教育の現場に参加して学ぶ「保姆見習法」
を導入して保姆を養成し、その卒業生たちの
活躍によってわが国の幼稚園教育は全国へ広
がったのである。英雄はまた、その九年余り
の短い幼稚園教育時代に、幼稚園の指導概要

を『恩物大意』としてまとめ、恩物のさまざま
な応用の仕方を具体的に示す『幼稚園恩物
図形』を制作し、また保育唱歌の選定なども
精力的に行っており、草創期の幼稚園教育の
普及・伝達に多大な貢献を果たしたと言える。
英雄をはじめとする草創期の保育者たちは、
このように、幼稚園教育を理解し、実践し、
伝えるという三位一体の努力をしなければな
らなかったのである。

本日、焦点を当てるのは、一つ目の幼稚園
「教育理解」への挑戦である。当時の日本に
は幼稚園のモデルは無かったが、書物はあつ
たのだからそれらを読めばわかったはず、あ
るいはフレーベルの恩物をまねてやった、と
いった定説があるかと思うが、私はそうは思
わない。幼稚園開設前後に、幼稚園を知る媒
体となった書物は、わずかに二冊。一つは、
桑田親五訳『幼稚園（上・中・下）』（一八七
六年一月〜一八七八年六月刊）、もう一つは関

信三訳著『幼稚園記』（全三巻及び附録）（一八七六年七月―一八七七年十二月刊）だけであり、幼稚園教育に関する考え方も指導法も異なる内容であった。通常であれば二冊を平行して読めば混乱してしまうところ、英雄は本筋をつかむすごい力があつたのだらう。彼女の幼稚園教育理解が当時の世界水準のものであつたことについては、後で触れる。

ここで、幼稚園教育理解のために重要な役割を果たしたのが、最初の幼稚園の主任となつたクララ・チーテルマン（松野）による伝習活動である。松野クララはドイツのベルリン生まれの人で、明治九年、ドイツに留学していた松野礪（カミヤ）という方と結婚するために来日された。日本に來た経緯については、立浪澄子先生がベルリンまで出掛けて調査され、その内容は『幼児の教育』誌に掲載されている（第一一巻第四号）。しかしクララがベルリンでどのような養成を受けたかを裏付ける証拠は得られず、その当時、幼稚園の勉強をしただ

らうということしかわかっていない。とはいえ、幼稚園開園の年に、幼稚園教育を理解し、それを伝えるだけのコミュニケーション能力を持つたうら若き女性が来日したことは、日本の幼稚園教育界にとって大変幸運だったと思う。

幼稚園開設直前の一八七六（明治九）年十一月六日から翌年三月十七日まで、松野クララ直伝の勉強会が開かれた。具体的にどういうテキストを使って伝授したかということはまだわかっていないのだが、この勉強会の内容を英雄がノートに取っており、その学習ノートから推理すると、『Der Kindergarten』（H.Goldammer, 1872）ではないかと私は考えている。この本は、Goldammerの単著ではなく、前文と結論部分の四十ページ以上をMarenholz-Buelow夫人という方が書いている。この方は、フレーベルの死後、ヨーロッパにおいて幼稚園を宣伝した方で、この本の前文には指導原理が示されている。この前

文の文章が、英雄の「代紳録」（前号参照）の記録の中に出てくるものと非常によく似ているのである。

これらの本を通して、結局、英雄はこういうやり方をしたと思う。——幼児教育は、「読み・書き・算術」の伝統的な教育とは異なるものである。子どもの天賦の才能、子どもの生まれながらに持つ力を認めつつ、手と目を使って道具を動かし、その感触、感覚を通して、自分の周りにある事物の形や大きさ、あるいは美しさを感じ得ること、言い換えるとも物の操作を通して知識と美と現実認識を身に付けていくことこそが、幼稚園教育の指導の要なのだとすることに彼女はたどり着く。英雄は学習ノートである「代紳録」を何度も何度も書き換えながら、だんだんこうした考えに至るのである。これは今でも参考になる資料ではないかと思う。

2 英雄の挑戦と奮闘を、現在と未来の保育活動につなげる

明治初期、幼稚園教育を担う最初のランナーとしての豊田英雄の為したさまざまな挑戦と奮闘は、現在と未来の保育とどうつながるかということを次に考えてみたい。

英雄の最大の仕事は、十九世紀後半の世界水準の幼稚園教育を、一八七〇年代の日本に築いたことである。当時の世界水準というのはフレールベルの教えであったが、その本質をよく理解し上手にこなして、幼稚園開設というナショナルプロジェクトを、英雄を中心に、世界のどこにも出て引けをとらない形で実現したといつてよい。それを裏付ける資料を紹介する。

英雄は東京女子師範学校附属幼稚園を辞めた後、イタリアへ赴くが、文部省からの命を受けイタリア、フランスの幼稚園視察を実施した。イタリアの幼稚園視察の報告が、明治二八年の『大日本教育界雑誌』に載っている。

「幼稚園は九十人を三組に分ち、一組三十人、教師一人、助手一人にて、保育の責に任ず。而して、甲の教場と乙の教場との間に小部屋を設け、外套、弁当等の置き場所とする。科目は、フレーベルのシステムをそのまま用いて、些少の変換も見ず……」

このような報告ができるのは、彼女がフレーベルのシステムをよく理解していたからこそであり、それ故にローマ市内の幼稚園教育の特色、ないしは水準を即座に判断できたと思うのである。「些少の変換も見ず」という言葉からは、フレーベルのシステムの導入にあたり自分たちがどんなに創意工夫を凝らしてきたかを言外に伝えてはいまいか。さらに、この文章の最後は、「その他一般の幼稚園であれば、皆大同小異なれば、あえて特に謹述せず。」という言葉でくくっている。何という自信にあふれた言葉だろう。この後、英雄はフランスへも行っているが、新しい発見をしていないのである。

今、二十一世紀となり、子育ての環境は大きく変わった。私たちは今、いろいろな保育活動を展開しているが、二十一世紀の世界水準の乳幼児教育を築くこと、これが、英雄に負けない、あのエネルギーを頂いてすることだろうと思う。例えば、今日では英雄の時代には考えられなかった0歳からの子どもたちの成長・発達を視野に入れた乳幼児教育、その充実が求められている。

また、子育ての場が家庭よりも保育園での比重が増す状況も出てきており、どうやって親の機能を生かしていくかという発想も以前より意識してしなければならない時代である。それから、子どもたちを育む地域資源も多種多様であり、公園や遊具、さまざまな機器など子どもたちの目の前にあり過ぎるほどあるのだが、それを子どもたちの発達に合わせ適切にチョイスして活用して保育活動を創っていくということも非常に大きな仕事ではないかと思う。

『幼児の教育』平成二十七年 総目録

◇春号

園空間が「場所」になる時 浜口順子
保育現場で気になるコトバ考5

「居場所」って何だ？

・放射能被害下の保育からの学び

・子どもたちの「生きられた時間」と
居場所 横井絃子

・「居」心地のいい「場所」でありたい
中村共芳

・適応指導教室から考える不登校の子
子どもたちの居場所 加藤美帆

子どもが育つ場所から 一人ひとりを
大切にする保育 佐藤寛子

私の保育ノート 心ひかれるものゝ小
さな子どもたちの日常の中で 中澤智子

育休日誌 母になるといふことその1
郡司明子

子どもは豊かな遊びの世界を生きている
① 子どもの遊びを丸ごと見るために 河邊貴子

古典の散歩道「こん狐」「狐」 六戸洋子

昔むかしのキンダーブック① 第五集
第五編「あり」を読む 吉岡晶子

幼児の教育アーカイブズとの対話①
画像にみる「幼児の生活」(1) 浜口順子

学ぶこと自体への欲求を支えられた現
職保育者の学び 児玉理紗

幼児の人間関係と保育者のかわり
柴坂寿子

遊びの中で育つ「心」と「体」の健康
宮里曉美

◇夏号

自然体験とは何か 浜口順子

コトバ考6 「自然体験」って何だ？

・自然が育む子どもと未来―自然とか
かわる健やかな育ちを目指して 大澤力

・日々、共にあるものとして 伊東良子

・保育者にとつての「自然体験」の意
味 室田洋子

・デンマークの「森の幼稚園」を訪れ
て 中村絃子

子どもが育つ場所から 「あそびでは
くらは人間になる」 宮本雄太

私の保育ノート 甥Yとの小さな冒険
育休日誌 母になるといふことその2 寒河江芳枝

育休日誌 母になるといふことその2
郡司明子

子どもは豊かな遊びの世界を生きている
② あこがれに向かう力 河邊貴子

古典の散歩道 フランスの二人のノー
ベル賞作家 中村俊直

昔むかしのキンダーブック② 「ツバ
メノオウチ」にみる戦前の遊戯作品 小栗百子

保育のクロスロード 保育は素敵な物語
(1) 十年後の手紙 湯澤美紀

◇秋号

夢かうつつか 浜口順子

コトバ考7 「夢中」って何だ？

・子どもが夢中で遊ぶ時 星三和子

・子どもはみんな「夢中」になる
下田浩太郎

・「夢中」であること―フロ―理論の
観点から 谷本龍男

・遊び」という過程―夢中になつて
遊ぶ日々 野口隆子

子どもが育つ場所から 新園舎で暮ら
す二つの幼稚園を訪ねて 高橋陽子

私の保育ノート 保育園の砂―ある日
の去りに際して 西隆太郎

育休日誌 母になるといふことその3
郡司明子

子どもは豊かな遊びの世界を生きている
③ 遊びで育つコミュニケーションの心 河邊貴子

古典の散歩道 「竹取物語」に学ぶ死生
観―「竹取物語」の深層 窪寺俊之

昔むかしのキンダーブック③ 子ども
と共に見つめる 灰谷知子

幼児の教育アーカイブズとの対話②
画像にみる「幼児の生活」(2) 浜口順子

高橋清賀子氏・大戸美也子氏「幼稚園
草創期の保育者に学ぶ―初代保姆
豊田美雄の挑戦」(1) 安治陽子

◇冬号

行事という教育経験 浜口順子

コトバ考8 「行事」って何だ？

・保育の日常と「ハレの日」 磯部裕子

・行事を楽しむ、伝えていく
すとうあさえ

・それでも行事はやつて来る！
石友里

・韓国の保育・幼児教育における「行事」
林志妍

子どもが育つ場所から 人と共に生き
る心を育む 古賀松香

私の保育ノート イメージを重ねて
育休日誌 母になるといふことその4 三宅智子

育休日誌 母になるといふことその4
郡司明子

子どもは豊かな遊びの世界を生きている
④ 子どもが遊ぶということ 河邊貴子

古典の散歩道 ウィニコットと「クマ
のプーさん」 井原成男

幼児の教育アーカイブズとの対話③
画像にみる「幼児の生活」(3) 浜口順子

高橋清賀子氏・大戸美也子氏「幼稚園
草創期の保育者に学ぶ―初代保姆
豊田美雄の挑戦」(2) 安治陽子

『幼児の教育』平成二十七年 総目録

ひろば



◇読者の皆様からご意見を頂きました◇

実践例や子どもについての記述など、保育や子どものことを考えている私自身にとっても、また、保育を学ぶ学生にとっても、とても読みやすく大事なことが学べる内容がたくさんあります。(40代大学等研究者)

保育の方法に偏った内容の雑誌が多い中、子どもを主軸に置き、さまざまな角度から丁寧に保育をとらえていく姿勢を貫いている、主張のある出版物だと思います。

(40代幼稚園教諭)

写真は多いが、イラストや図は少ない。保育は文章だけで語りきれないことも多いと思うので、イラストなど多用するとわかりやすいかなと思う時がある(著者にもよる)。

(40代幼稚園教諭)

幼児だけでなく、乳児のテーマもあると保育園やこれからの認定こども園の読者も増えるのではと思います。(40代保育所保育士)

いかに「効率」よく子どもを伸ばすか、いかに見目良く子どもが育っているように見せるかが、子どもを育てる者たちの意識になってきているように思います。(中略)時には、「遊ぶことの大切さ」「遊びの中で育つもの」「脳科学と遊び」など、科学的な視点の記事を載せていただけると、「見た目の育ち」を求める保護者の心に響く説明ができて、ありがたいです。

(50代幼稚園教諭)

ありがとうございました。今後の誌面作りの指針とさせていただきますと思います。

皆様、『幼児の教育』へのご要望をお寄せください。

youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp まで。

本の紹介

『暴力はどこからきたか 人間性の起源を探る』
山極寿一 NHK ブックス 2007年

同種の動物同士の争いは、相手を抹殺することではなく、限りある資源(食物と交尾の対象)をめぐりいかに相手と共存するかを模索することであると著者は言い、霊長類の食と性をめぐる葛藤を眞に説きながら、人間社会に見られる争いについて拙速なく最終章最後半で言及していく。

「(今日の人間社会の暴力的な混乱状態から抜け出すには)人間のもつ能力をもっと活用することだ、と私は思う。人間の社会性を支えている根源的な特徴とは、育児の共同、食の公開と共食、インセストの禁止、対面コミュニケーション、第三者の仲裁、言語を用いた会話、音楽を通じた感情の共有、などである。霊長類から受け継ぎ、それを独自の形に発展させたこれらの能力を用いて、人類は分かち合う社会を作った。それは決して権力者を生み出さない共同体だったはずだ。われわれはもう一度この共同体から出発し、上からではなく、下から組み上げる社会を作っていかなければならない。」「人類は多産性を獲得して以来、共同で育児をすることを社会の中心に据えてきた。…育児に関する行動やコミュニケーションには文化の違いを超えて普遍的な特徴がいくつもある。それを利用して、人間はもう一度社会の和と力を取り戻すことができると私は思う。」

保育は、人を生かすこと・生きさせること(だけ)を思う営みである。殺すことの対極にある。この時代に生き、殺さないでほしい、人間の誇りや宗教心・信仰心を踏みつけるような言動もやめてほしい、と、ただそれだけをひたすらに願いつつ、長年、霊長類の社会的行動のフィールドワークを行ってきた著者の言葉をかみしめたい。

(KT)



編集後記

子どもの頃の大掃除の記憶……万事に頑張らないわが家は畳上げまではしなかったが、それでも障子の張り替えは皆でやった。手始めに障子紙を取り去るのは子どもたちの仕事。指でブスブスと穴を空け、豪快に破り、はぎ取るのが痛快だった。水洗いして乾かした棧を逆さにして、新しい紙をスーッと横に上の段から貼っていくのが母の流儀。上下を元に直すと、紙の重なりが埃のたまりにくい順になるとのことで、最後に霧吹きをかけて完了。乾いてバリッと仕上がる頃には、もう日が傾きかけていた。庭でたき火をし、その日に家じゅうから出た紙くずなどを燃やして、焼き芋をした。

こうして振り返ると、かなりの大騒動である。それはもう「お手伝い」などといったものではなく、始まったが最後、居場所もなく、「全員参加」を余儀なくされる、家をあげての一大イベントであった。

今、そんな大がかりなことをする家はきっと少ないだろう。わが家も、家を建て替え、和室が減ったこともあり、障子紙の張り替えは何年かに一度で、しかも表具屋さんをお願いするようになった。優れた住居用洗剤やモップなども開発され、掃除の仕方もういぶん変わった。

大掃除をせずとも新年はやって来る。でも、身の回りを少しでもきれいにし、清々しい気分で新年を迎えたいという気持ち、新しい年を前にした期待のようなものは、時代を経ても変わらずあるように思う。その他の年中行事や園で行われる行事にも、そこに込められた願いや意図がある。毎年毎年の繰り返しの中で伝承されていくのは、その形だけでなく心も共にあってほしいと今号の特集を読んで思った。

さて、今年も残すところあとひと月。来年が良い年でありますように。(TK)

次号予告 幼児の教育 春号 2016年3月刊行予定

新企画、新連載がスタート! 充実した内容でお届けします。

特集 保育現場で気になるコトバ考 9
—「安心」って何だ?— 入江礼子氏ほか

新連載 保育エッセイ 川田 学氏

新連載 「おばあちゃんの孫育て日誌」 瀧田節子氏

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。


幼児の教育 冬号 第115巻 第1号

平成28年1月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館
電話／03-5395-6604(編集)
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／本体834円＋税
©日本幼稚園協会 2016 Printed in Japan

編集委員／伊集院理子
菊地知子
佐藤寛子
灰谷知子
編集協力／フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●



保育のいろんなシーンで使える イラストカット&おたより文例

CD-ROM
付
for windows



日々のおたよりづくりをもっと楽しく！
文例付きで簡単に使えるイラストカット集。
おたよりづくりをちょっとの工夫で楽しめるコツや、イラストをおたよりだけでなく、壁面や行事のプログラムなど、保育のいろんなシーンで使えるアイデアなど、コラムも充実！



池田かえる／コラム執筆

定価1,998円（税込）

26×21cm 128ページ CD-ROM付き

ISBN978-4-577-81390-4 109-60

※画像は見本です、変更になる場合があります。

point1 要望の多いイラストがいっぱい

季節や行事のイラストに加え、おたよりでよく使う食育・保健のイラストや、要望の多い普段の生活シーンのイラスト、また保育現場でますます必要とされている0・1・2歳のイラストなど、使いやすいイラストがもりだくさん。



point2 コラムも充実！

イラストカットにちょっとした工夫をプラスして、ぬくもりやオリジナリティを感じられるおたよりにするには？

イラストカットをおたよりだけでなく、保育のいろんなシーンで活用するアイデアは？

保護者と子どもが、楽しみながら見てくれるおたよりのアイデアって？

おたよりづくりやイラストカットの活用が、もっと楽しくなるコラムが13本！

地震、大雨などの自然災害や 虐待、アレルギーへの対応など、

あなたの園のマニュアル作りを しっかりサポート！

保育ナビ ムック

事例で見る 園の防災・危機管理 —子どもたちの安全のためにできること—

認定こども園・幼稚園・保育園 —
これからの防災・危機管理のスタンダードがわかる！

ポイント

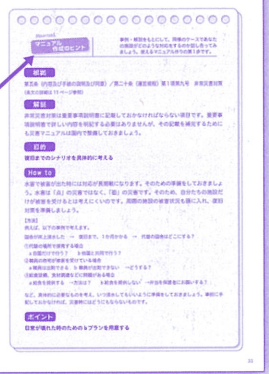
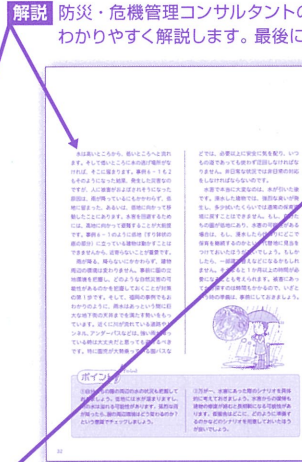
「平成26年内閣府令第39号」（「子ども・子育て支援法」に基づく〈特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準〉）に即した防災や危機管理に対する考え方に準拠しながら、これからの防災・危機管理のスタンダードを確認できます。事例→解説→マニュアル作成のヒントと読み進めることで、ケースにあわせた、あなたの園独自のマニュアル作りの道筋がわかります。



脇 貴志／著 定価1,944円(税込)
26×18cm 本文色数：2色 80ページ
ISBN978-4-577-81388-1 109-51

事例 防災8事例、危機管理12事例を紹介します。

解説 防災・危機管理コンサルタントの脇氏が、これまでの実務経験を元に、わかりやすく解説します。最後に読み解きのポイントがあります。



株式会社アイギス 代表取締役 脇 貴志 氏
園向けに、防災・危機管理についてのコンサルティング
事業を行う。日興証券株式会社、AIU保険会社、株式
会社アスタリスを経て独立。
2009年株式会社アイギスを設立。
年間講演数、約130本。事故相談件数、約1,000件。

マニュアル 事例・解説をもとに、同様のケースで園がどのような対応をする
べきか話し合うポイントを紹介します。自園オリジナルの使える
マニュアル作りの第1歩です。

※画像は見本です、変更になる場合があります。

定価 本体八三四円＋税